



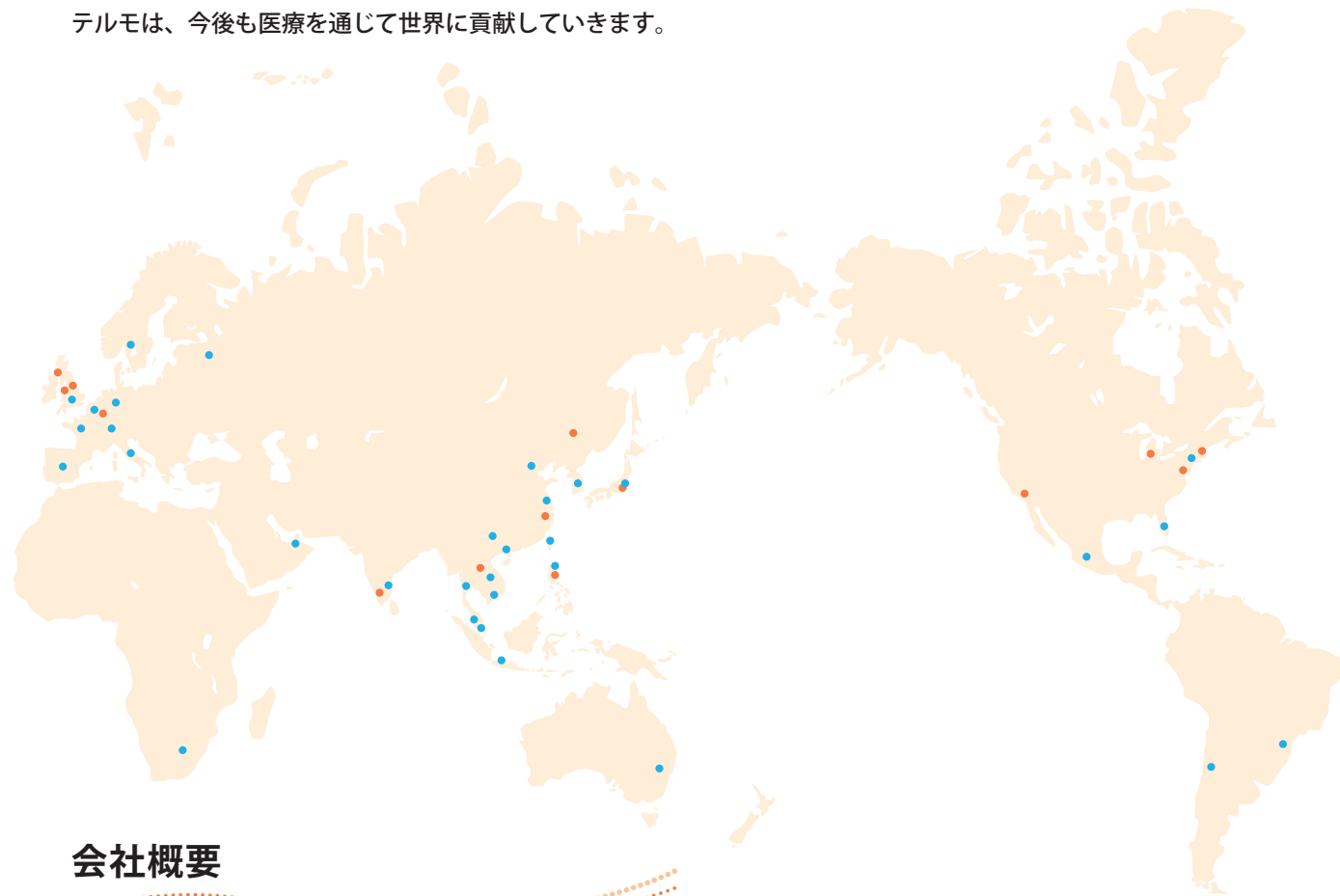
社会・環境報告書 2008

Social and Environmental Report



事業概要

テルモの製品は世界中で生産・販売され、
世界160カ国を超える国々で使われています。
テルモは、今後も医療を通じて世界に貢献していきます。



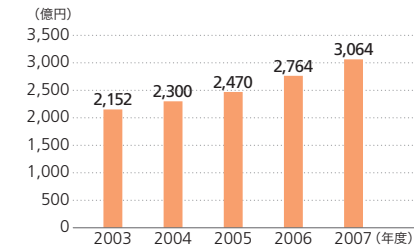
会社概要

名称	テルモ株式会社
設立	1921年9月
資本金	387億円
売上高	3,064億円(2007年度連結)
代表者	代表取締役社長 高橋 晃
社員数	12,322名(2008年3月末)
本社所在地	〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷2-44-1 03-3374-8111(代)
事業内容	医療機器・医薬品等の製造・販売
株式	東証一部上場

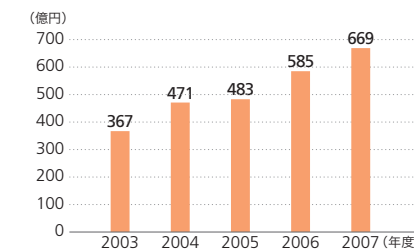
● 生産拠点 (20)
● 販売・マーケティングオフィス (77)
(2008年3月現在)
地図上のマークは各地の主な生産拠点、
販売・マーケティングオフィスを表しています。

企業データ(連結)

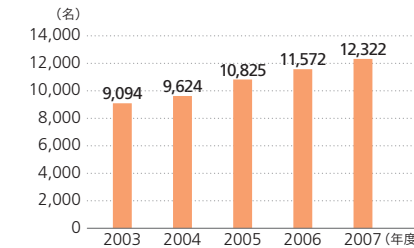
売上高の推移



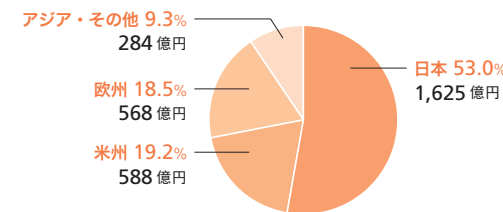
営業利益の推移



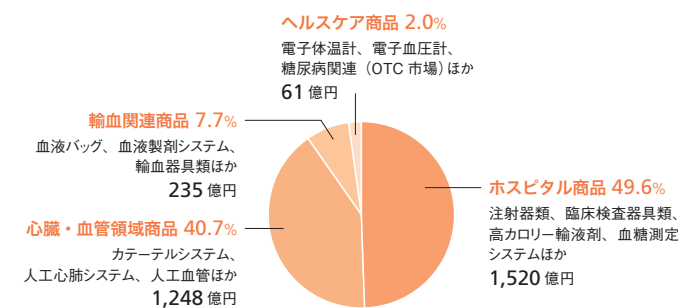
社員数の推移



地域別売上高構成(2007年度)



セグメント別売上高(2007年度)



CONTENTS

事業概要	1
トップメッセージ	3
企業方針	5
特集 いのちをつなぐテルモの人工心臓	7
CSR活動の目標と実績	11
マネジメント テルモの約束	
コーポレート・ガバナンス/内部統制	13
コンプライアンスへの取り組み	14
社会報告 社会への貢献	
お客様とのコミュニケーション	15
安全・安心な品質への取り組み	19
株主・投資家への責任	20
アソシエイトの成長を支える制度	21
地域社会への貢献と交流	23
環境報告 自然との共生	
環境にやさしい事業活動をめざして	25
環境意識を高めるコミュニケーション	26
環境に配慮した製品	27
地球温暖化防止のために	29
資源の有効利用をめざして	31
化学物質管理・グリーン購入の推進	32
信頼性を高める環境監査の実施	33
「社会・環境報告書2008」に対する第三者意見	34

● 本報告書掲載以外にも、
ウェブサイトで環境情報をご紹介します。
社会・環境報告書 ▶▶▶ 「補足環境データ」をご覧ください。
http://www.terumo.co.jp/company/csr/social_r.html

トップメッセージ

「人にも環境にもやさしい医療」をめざし、より価値のある取り組みを進めます

◎ 環境問題への本格的な取り組みに挑戦する

近年、地球を取り巻く環境は劇的に変化しています。自然環境の汚染や地球温暖化、そして資源価格の高騰など、多くの問題が毎日のように叫ばれるようになり、もはや企業の経営は、環境問題を抜きにしては成り立たない状況になってきました。

テルモは今、改めて真正面から環境問題に向き合いたいと考えています。もちろんこれまで、環境に配慮した活動を行うための努力を続けてきました。工場の省エネルギー化や排出ゴミの削減なども実行し、2006年度には国内全事業所それぞれにおいてゼロ・エミッションを達成。製品開発においても、「いかにして製品使用後の廃棄物を減らすか」という視点で、「安全・安心かつ廃棄物の少ない医療機器」を開発してきました。そして2008年度より私たちは、二酸化炭素の排出量を製品売上高あたり1990年度比50%削減することを、5年間の中長期目標として掲げ、活動を開始しました。

しかし、私たちは、これだけでは足りないと考えています。環境問題への対策は、長く続けなければ意味のないものです。5年、10年単位どころか、50年、100年単位で考え、対策を講じていかなければなりません。

「真の意味で環境にプラスになること」。

「本当に価値があり、責任を持って続けられること」。

こうしたことに新たな覚悟で、本気になって取り組まなければならないのです。環境に配慮した開発基準を策定して製品の開発を進め、さらには石油を原料としない素材を活用した医療機器の開発など、環境のための技術革新にも、果敢にチャレンジしていきたいと考えています。

テルモにとっての2008年は、「環境課題への本格的な取り組みをスタートさせる年」。これまで以上に真摯に、そして大胆に、「環境にやさしい企業」をめざしていきます。

◎ 「人にやさしい医療」が、やがて環境を変化させる

テルモは1921年の創立以来「医療を通じて社会に貢献すること」を企業理念として、変わることなく追求し続けてきました。そして今、「人にやさしい医療」の実現をビジョンに掲げ、取り組んでいます。

治療や手術の際に患者さんにかかる負担を少しでも減らしたい。その想いに基づいて、痛みの少ない注射針や低侵襲治療*1が行えるカテーテルなどを数多く開発、製品化してきました。また、2007年からはヨーロッパで補助人工心臓「DuraHeart」の販売を開始し、それまで病院で寝たきりの日々を送っていた患者さんが、家庭に戻って生活できるようになりました。

このように、患者さんの痛みを軽減し、日常生活が送れるような医療機器をつくることで、患者さんのQOL*2を保ち、そして「人にやさしい医療」につながると考えています。

また、テルモでは、製品の開発だけでなく、医療にまつわるサービスを提供することも「人にやさしい医療」につながる重要な要素と考えています。例えば、2007年規模を拡張した総合医療トレーニング施設「テルモメディカルプラネックス」。ここでは最新の医療設備を使って、医師や看護師が高度な医療技術、チーム医療などを学べるトレーニングプログラムの提供を行っています。

医療は医療従事者、企業、患者さんも含めた関係者全員が協力しないと成り立たない。ですから私たちは、医療機器の開発だけでなくトータルな視点で医療に貢献したいと考えています。「テルモメディカルプラネックス」などで高い技術を習得した医師が、低侵襲の医療機器を使って、患者さんとともに負担の少ない医療を実現する。このようなサイクルが生まれることによって、初めて真に「人にやさしい医療」が

実現するのではないのでしょうか。そして同時に、患者さんの入院期間が短くなることは、医療費や人的コスト、廃棄物を抑えることにもなるのです。

「人にやさしい医療」とは社会的な生産性を高め、やがて「環境にやさしい医療」へとつながっていくものです。だからこそ、今後も「人にやさしい医療」を追求し続けたいと考えています。

*1 低侵襲治療：患者さんの身体に対する負担や影響が少なくすむ治療。

*2 QOL：Quality of Lifeの略。生活の質。

◎ 貴重な人材とともに、よりグローバルに活動を進める

こうしたテルモの取り組みや考えの核となっているのが「人材」です。テルモではかねてより、「人を軸とした経営」を経営方針の一つとして掲げてきました。

当然、環境問題への取り組みも、アソシエイト（社員）一人ひとりの意見や意思を最大限に活かして進めています。2008年度からは、環境問題をテーマにした活動を行う「グリーンプロジェクト」を発足させました。「環境に配慮した製品の開発」や「廃棄物の削減」、「事業活動における二酸化炭素排出量の削減」など、さまざまなテーマを掲げ、アソシエイト自らが率先してプロジェクトを進めています。

国や言葉の枠にとらわれず、すべてのアソシエイトを大切にしたい。それがテルモの思いです。その上で、全アソシエイト、全医療関係者が一体となって、「人にも環境にもやさしい医療」を実現するような環境をつくっていく——。これがテルモに課せられた社会的責任なのです。今後も誠実にものづくりを追求しながら、より大きな視点で企業活動、社会貢献活動に取り組んでいきたいと考えています。



代表取締役社長

高橋 晃

企業方針

企業理念

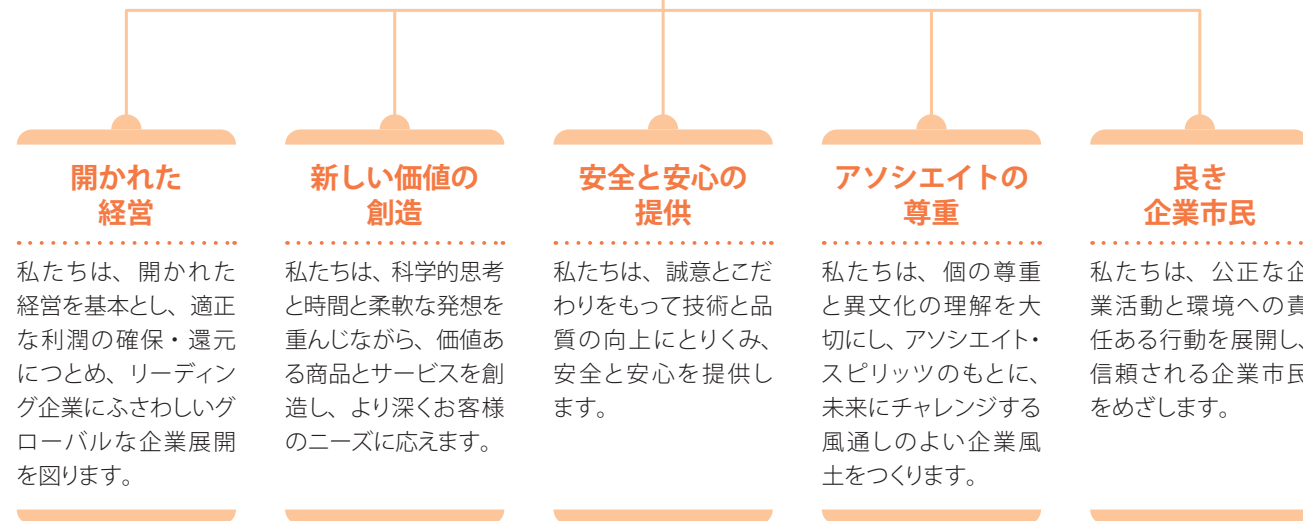
医療を通じて社会に貢献する。

私たちは、医療の分野において価値ある商品とサービスを提供し、医療を支える人・受ける人双方の信頼に応え、社会に貢献します。

ビジョン

テルモはユニークな輝く技術で、人にやさしい医療を実現します。

5つのステートメント (企業活動規範)



アソシエイト・スピリッツ

「人は資産」と考えるテルモでは、社員を「アソシエイト」と呼んでいます。1996年にアソシエイト自らが考え出した4つのキーワード「アソシエイト・スピリッツ」は、一人ひとりが「主体的にチャレンジし、お互いを尊重しあうことでチーム力を発揮し、お客様により高い品質とサービスを提供する」ことを宣言しています。

主役	いい仕事
がんばれ、自分。自らの責任で主体的に役割を果たします。	自分が考え、未来にチャレンジ。最高のレベルをめざし、楽しく実践します。
チーム力	視点
相手の思いを聴きあう。お互いを尊重し、本音のコミュニケーションで大きなチーム力を発揮します。	アンテナを高く。常にお客様の視点で考え、高い品質とサービスで、期待に応えます。

テルモのこころ

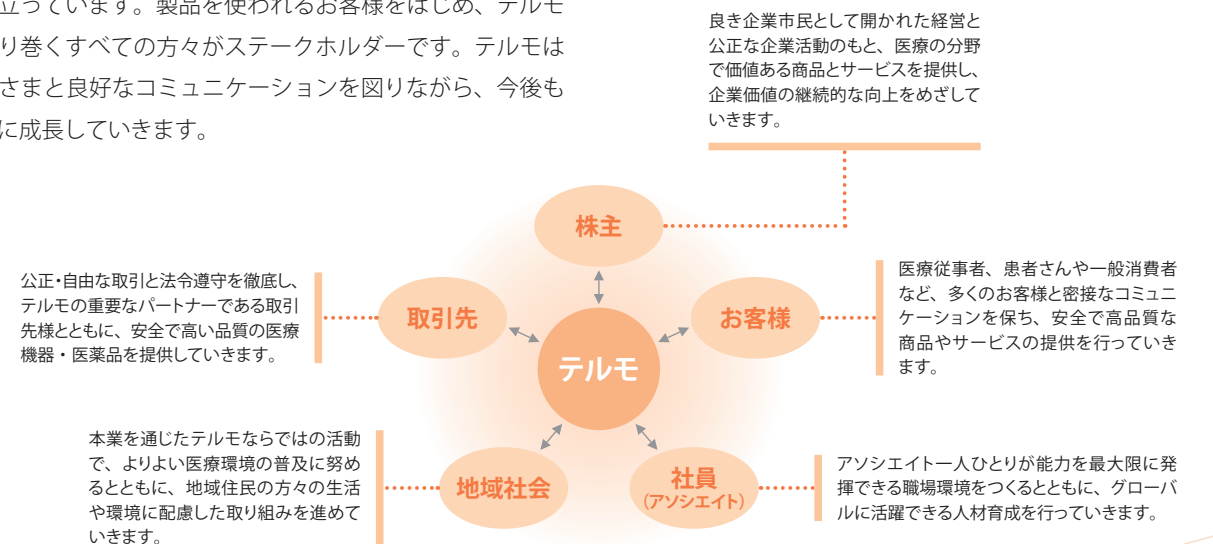
創業以来培ってきた独自の考え方や仕事の仕方はテルモの個性であり、テルモだけが作り出せる価値やブランドの源泉です。その一方で、常に変化する社会にすばやく対応し、新しい価値を創造・提供できなければ、企業は存在価値を失い、社会的使命を果たせません。

これからもテルモがテルモであり続けるためには、柔軟に変えていくべきものも必要ですが、未来に向かって決して変えてはいけない基本的な考え方と志があります。それが「テルモのこころ」です。



テルモのステークホルダー

テルモの事業活動は、さまざまな立場の方々に支えられて成り立っています。製品を使われるお客様をはじめ、テルモを取り巻くすべての方々がステークホルダーです。テルモはみなさまと良好なコミュニケーションを図りながら、今後ともに成長していきます。



いのちをつなぐ テルモの 人工心臓



心疾患は日本人の死因第2位

2007年に国内で亡くなった方の数は、約110万人。死因別の順位は、悪性新生物（がん）が第1位、心疾患が第2位、脳血管疾患が第3位となっています。そのうち、心筋梗塞や心不全などの心疾患で亡くなった方は約17万5,000人と、全体のおよそ16%を占めています*1。日本では1997年に「臓器移植法」が制定され、国内での心臓移植が可能になりました。しかし、実際に移植できたのは、2007年7月までの10年間で45人ほどにすぎません。

心疾患治療の最先端をいくアメリカでは、人口の約2~3%にあたる600万人が軽・重症の心臓病を患っています。重症な心疾患では、何らかの措置をとらないと50%以上の方が1年以内に亡くなっているのです（テルモ調べ）。

アメリカでの心臓移植数は、年間およそ2,200例。移植大国といわれるアメリカであっても、患者数に比べてドナー（臓器提供者）の数は、圧倒的に少ないのが現状です。このような背景から、より多くの患者さんの命を救う有効な手段として、心臓に代わる、または補助の働きをする人工心臓の開発が進められてきました。

*1 出典：厚生労働省「平成19年 人口動態統計月報年計（概数）の概況」

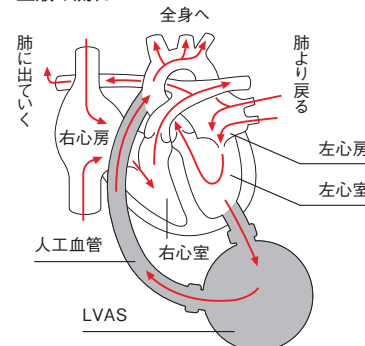
人工心臓がいのちを「つなぐ」

そもそも心臓とは、全身に血液を送り込むポンプの役割をする、生命維持に不可欠な臓器です。左右にそれぞれ心房・心室があり、左心室から送り出した血液は、全身を駆けめぐって右心房へ戻り、右心室から送られた血液は肺をめぐって左心房へ戻ります。この働きを模倣することから、人類の人工心臓開発への挑戦が始まりました。

初期に行われたのは、心臓の代わりに機械を永久に埋め込む全置換型の人工心臓の研究でした。1958年、アメリカで阿久津 哲造医師がイヌに人工心臓を埋め込み、1.5時間の生命維持に成功しました。1969年にはアメリカの心臓研究所で患者さんに初めて全置換型の人工心臓が埋め込まれました。64時間後に臓器提供を受けられたことから、人工心臓は移植までの「つなぎ」にするという発想が生まれました。

また、心臓は残したまま、負担の大きい左心室の補助をすることで、患者さん

心臓と左心補助人工心臓のしくみと血液の流れ



重度の心疾患で寝たきりだった患者さんが、歩いたり、家族と過ごしたりと自宅で生活を送れるようになる。一人でも多くの患者さんを救いたい——。そのテルモの思いは、遠心力を利用した世界初の磁気浮上型左心補助人工心臓「DuraHeart」の開発につながりました。本格的な開発から12年経った2007年、ヨーロッパで販売を開始。人工心臓の歩みは、「人にやさしい医療」の道でもあります。

の80%は心機能が回復することが分かり（テルモ調べ）、左心室補助装置（LVAS*1）の開発へと流れていったのです。

*1 LVAS：Left Ventricular Assist Systemの略。

心臓を「補助」するLVAS

1970年代に開発されたLVAS第1世代は、大きさが小型の冷蔵庫ほどの動力装置と体外でつながっているため、退院することができませんでした。また、ドクドクッと血液を送り出す拍動流型は装置への負担が大きいため、1990年代以降の第2世代のLVASでは、血液を絶え間なく流す連続流型の開発が主流になりました。プロペラで連続的に血液を

送り出す、より小型化した軸流ポンプです。

2000年代に入ってから第3世代では、インペラ（羽根車）を宙に浮いた状態にすることで、接触する軸受けをなくした連続流ポンプの開発が始まりました。

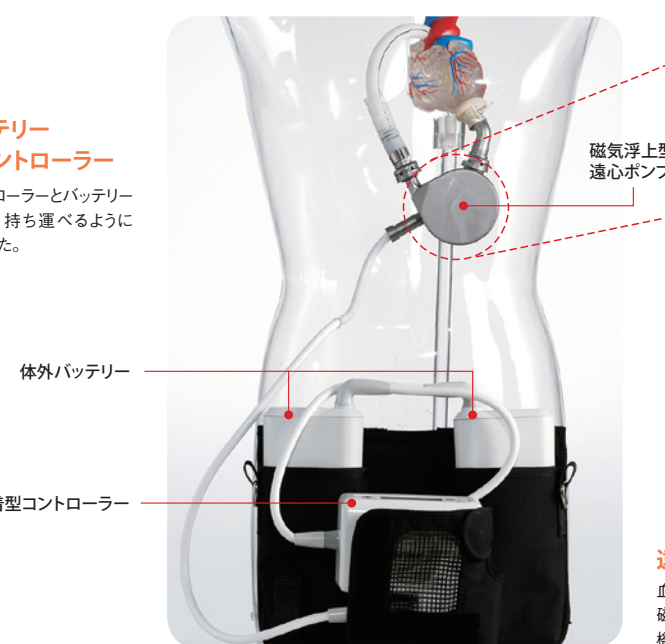
血栓の発生を抑えることや、安定した流量を確保した小型の人工心臓をめざして、開発が進められてきました。

テルモ、人工心臓の開発に取り組む

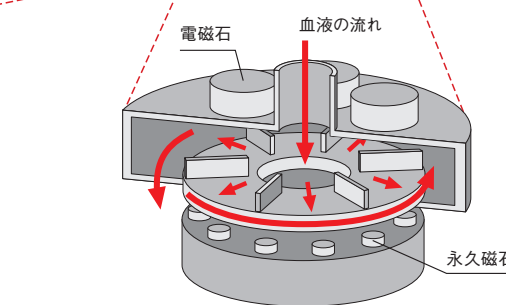
「医療を通じて社会に貢献する」ことが企業理念であるテルモにとって、患者さんの命を救う人工心臓の開発は大きな夢でした。

テルモの補助人工心臓「DuraHeart®」のしくみ

**体外バッテリー
装着型コントローラー**
体外にコントローラーとバッテリーを装着する。持ち運べるように軽量化を図った。



**磁気浮上型
遠心ポンプ**
左心室に取り付け、血液循環を補助する働きをする。中央にあるのがインペラ（羽根車）。



遠心ポンプの内部
血液室内のインペラを、電磁石と永久磁石で挟み込んだ構造。インペラは磁気力で浮かんで回転し、血流を生み出す。インペラが浮かんでいるので機械的な摩擦がまったくない。

人工心臓の歴史

1935	1958	1963	1980	1994	1995	1997	1998	2000	2002
飛行家・リンドバーグが人工心臓の原型を開発	阿久津 哲造医師が人工心臓をイヌに埋め込み、1.5時間の生命維持に成功 (米国)	Dr.ドゥベキエーによる補助人工心臓の臨床応用開始 (米国)	三井記念病院で国内初の人工心臓の埋め込み手術			日本で臓器移植法施行			FDA*1が補助人工心臓の永久使用を条件付きで承認

「磁気浮上型遠心ポンプ」考案の赤松 映明教授とNTN株式会社との共同開発開始

通産省 (現経済産業省) の体内埋め込み型人工心臓システムのプロジェクトで基礎研究開始

動物実験で864日の生存に成功 開発チームをアメリカへ移転

- *1 FDA: Food and Drug Administrationの略。米国食品医薬品局。
- *2 CEマーク: 欧州連合 (EU) 地域で販売される指定製品に貼付を義務付けている安全マーク。EU (EC) 指令の必須安全要求事項に適合していることを示す。

最初にとりかかったのは、もともとテルモが持っていた「人工心肺システム*1」の遠心ポンプを、人工心臓へと応用できる技術を見つけることでした。そこで、「磁気浮上型遠心ポンプ」を考案した元京都大学の赤松 映明教授と、ベアリングメーカーNTN株式会社との共同研究に着目。最大の課題である血栓の発生を抑えることにつながるのではと考え、テルモとNTNでポンプの共同開発を1994年から進めました。

- *1 人工心肺システム: 主に心臓を止めて行う心臓や大血管手術の際に、血液を送り出す「心臓」と、ガス交換をする「肺」の代わりに果たす製品。

磁気浮上型の遠心ポンプ

磁気浮上とは、磁石の力でインペラ (羽根車) を押し上げて浮いた状態にすることです。リアモーターカーの原理と同じで、永久磁石のついたモーターが稼働するとインペラも回転し、その遠心力で血液がよどみなく流れるのです。軸がなく、インペラがどこにも触れないため、血液へのダメージを減らすことが期待できました。

1995年からは、当時の通産省による国家プロジェクト、NEDO*1の体内埋め込み型人工心臓システムの基礎研究に、テルモは主幹企業として参加 (2000年に終了)。1998年に、「DuraHeart」の初期モデルを使った動物実験で864日のヒツジの生存に成功しました。開発の着手から数年で、磁気浮上

型遠心ポンプのコンセプト、デザインを証明するプロトタイプを完成させることができたのです。

そして1999年、磁気浮上型左心補助人工心臓の製品化を、会社として正式に決定しました。

- *1 NEDO: 独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構。

安全性や使いやすさへのこだわり

2000年に開発の場をアメリカへと移すと、2003年にテルモ100%出資の子会社であるテルモハート社を設立。耐久性に優れているチタンをポンプの素材に採用し、ポンプの小型化・軽量化に本格的に取り組みました。同時に、人工心臓本体だけでなく、付属のコントローラーやバッテリーなど、システムを構成する20を超えるパーツの開発も進めていきました。

人工心臓を埋め込んでからの日常での取り扱い、患者さん自身が行います。そのため、絶対にポンプが止まらない安全設計でありながら、使いやすさを追求していくことが求められます。

また、コントローラーやバッテリーは、合わせてノートパソコンほどの重さにまで軽量化しました。バッグに入れて肩から提げること、外出も可能です。

安全性と信頼性、そしてユーザビリティを限りなく高めて



ミーティングを重ね、あらゆる可能性を追求する



実験を繰り返してデータを集め、より安全で使いやすい製品へと高めていく



ときには職場で簡単なパーティも。チームワークを深める大切な場となる

テルモの動き

テルモハート社設立	ドイツで「DuraHeart」の臨床試験開始	「DuraHeart」がヨーロッパでCEマーク*2取得、販売開始	アメリカで「DuraHeart」の臨床試験開始
-----------	------------------------	----------------------------------	-------------------------

2003	2004	2007	2008
------	------	------	------



テルモハート社総出でヨーロッパへの初出荷を見送った

世界の動き

いくために、数えきれないほどのトライアンドエラーを繰り返して、「DuraHeart」システムは完成したのです。

2007年、ヨーロッパで販売を開始

2004年、ドイツで「DuraHeart」の臨床試験を開始。2007年2月にCEマークを取得し、同年8月からヨーロッパでの販売が始まりました。阿久津医師がイヌに初めて人工心臓を埋め込んでから、ちょうど50年後の販売となりました。

心臓移植のドナーを待ち続けるしかなかった患者さんにとって、人工心臓は大きな希望です。現在は心臓移植までのつなぎとして使用されていますが、今後は長期に使用できる次世代型の人工心臓を開発することを目標にしています。

医療を通じた貢献の一步先へ

12年の歳月をかけてつくりあげた「DuraHeart」。テルモは、企業理念の「医療を通じて社会に貢献する」ことを事業活動の前提としながら、製品の開発に取り組んでいます。

“医療を革新する”ような最先端の医療機器が、患者さんの命を救うことにつながると信じ、これからも果敢に挑戦していきます。

- ※ 「DuraHeart」はヨーロッパでの販売名称です。

心不全の患者さんを、人工心臓で自宅での生活に戻してあげたい。グループ全体で医療に貢献していくことが、テルモの使命です。



上席執行役員
テルモハート社 会長兼CEO

野尻 知里

「DuraHeart」の開発に当初から携わり、強い使命感とリーダーシップでプロジェクトを牽引してきた。

心臓外科医として、私は助けられなかった多くの命を見してきました。重い心不全の患者さんを、人工心臓によって自宅での生活に戻してあげたい。それが私の考える「人にやさしい医療」であり、やらなければいけない使命だと感じています。

テルモハート社には約130名のアソシエイトがいますが、一番大事なものは「チームの力」です。ポンプだけでなくコントローラーや、コントローラーを監視するコンソールなどがあって「DuraHeart」が成り立つように、私たちの誰が欠けても成功しません。一つのチームであることを、アソシエイトには常に意識してもらっています。

また、アソシエイトにとっての大きな喜びは、「DuraHeart」埋め込みの手術によって日常生活が送れるようになり、患者さんが元気に回復されたことを知る事です。

今後は、人工心臓やその周辺のデバイスなど、テルモが得意とする分野で、グループ全体で医療に貢献していく。それこそがテルモの使命だと考えています。



「DuraHeart」を埋め込んだ患者さんと一緒に

CSR 活動の目標と実績

マネジメント・社会・環境パフォーマンスの取り組み項目を充実させながら、その実績と自己評価を掲載しています。
今後も継続して社会貢献活動や環境保全活動を推進し、良き企業市民として適正な情報を開示していきます。

評価 ○：目標達成 △：目標を一部未達成 ×：目標を未達成 -：該当なし

取り組み項目	掲載ページ	自主目標(中長期目標)	2007年度実績	2007年度評価	2008年度の取り組み
マネジメントパフォーマンス					
内部統制への取り組み	13-14	● 内部統制システムの継続的な見直しと整備	● 内部統制システムの整備	○	● 内部統制システムの整備 (「テルモグループ行動規準」の制定)
コンプライアンスの推進	14	● コンプライアンス研修の継続	● 新入社員、中途採用社員、新任リーダーに対する コンプライアンス研修の実施	○	● コンプライアンス研修の継続

社会パフォーマンス					
アクセス性の高いコールセンター	17	● 受信率95%以上、着信応答時間2.5秒以内の維持	● 受信率96.7%、着信応答時間2.11秒	○	● 受信率95%以上、着信応答時間2.5秒以内の維持
障害者雇用の推進	—	● 障害者雇用率1.8%の維持	● 2008年3月末現在、障害者雇用率1.89%	○	● 障害者雇用率1.8%の維持
労働安全衛生	—	● 死亡・重大労災をゼロに、労災件数を前年度からダウン	● 2007年度死亡・重大労災ゼロ(前年度0件)、その他労災14件(前年度8件) 度数率*1:1.75785、強度率*2:0.00072	△	● 死亡・重大労災をゼロに、労災件数を前年度からダウン
女性社員の育成	—	● 性差なく、能力・業績をベースとした育成・登用を実施	● 女性管理職比率2.9%(2008年3月末現在)	△	● 性差なく、能力・業績をベースとした育成・登用を推進
公正な採用の推進	—	● 人種・国籍・性別・宗教・身体などに関係なく、 能力をベースとした採用を実施	● 採用担当者の教育、マニュアルの整備	○	● 公正な採用及びそのための採用担当者の教育を継続

*1 度数率：労災における死傷者数÷延べ労働時間×1,000,000 *2 強度率：延べ労働損失日数÷延べ労働時間×1,000

環境パフォーマンス					
事業が環境へ与える影響の把握	—	● 開発・生産・営業活動の中で、環境に与える影響を定量的に把握	● 環境影響評価を継続的に実施 ● HCFC*1の代替についての検討を実施	△	● 環境影響評価を継続的に実施 ● HCFCの代替についての検討を継続
ボランティア活動の支援	26	● ボランティア活動の支援	● 「テルモ富士山森づくり」の実施(郷土樹種による自然林再生) ● 「多摩川クリーン作戦」(東京)・「梅沢海岸清掃」(神奈川)への 参加をはじめ、ボランティア活動の支援	○	● 「テルモ富士山森づくり」をはじめ、 ボランティア活動の実施と支援を継続
環境コミュニケーションの推進	26,30	● 「社会・環境報告書」の発行 ● 環境月間の取り組み	● 2007年度「社会・環境報告書」を発行 ● 環境月間の取り組み(国内全工場周辺地域のごみ拾い) ● 社内ホームページで、環境月間の特集記事を連載 ● 社員参加型エコ活動に1,908名が参加 ● 環境法関連セミナーを実施 ● 環境表彰を実施	○	● 2008年度「社会・環境報告書」の発行 ● 環境月間の取り組み ● 社員参加型エコ活動の継続
環境に配慮した製品	27-28	● 医療現場での脱水銀 ● 各国規制への対応	● 医療機関向け電子血圧計の販売を促進 ● 中国版RoHS指令に対応 ● RoHS指令対応製品の開発を促進 ● 台湾の電池規制に対応 ● 使用済み小型充電式電池の回収リサイクル	○	● RoHS指令適合製品の開発と保証システムの構築を継続
エネルギーや資源の有効活用	29-30	● 2010年度までに、二酸化炭素排出量を 1990年度比25%削減(製品売上高原単位)	● 自主目標の見直し「2012年度までに、二酸化炭素排出量を1990年度比 50%削減(製品売上高原単位)」 ● 二酸化炭素排出量の製品売上高原単位は、1990年度比35%削減を達成 ● 「チーム・マイナス6%」に参加し、社内エコキャンペーンを実施	○	● 見直し後の自主目標で活動を開始 ● 海外事業所のエネルギー使用状況の調査を継続
廃棄物の削減	31	● 営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量を 総排出量比1%未満にする	● 国内生産事業所(富士宮工場、愛鷹工場、甲府工場)と 研究開発センター、本社でゼロ・エミッション*2を継続	○	● 営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量を 総排出量比1%未満に継続 ● 電子マニフェストの利用拡大
環境汚染の予防	32	● ジクロロメタンの排出量99t以下を継続	● ジクロロメタン排出量76t ● エチレンオキシドの敷地境界濃度の自主測定を実施	○	● ジクロロメタンの排出量99t以下を継続 ● エチレンオキシドの敷地境界濃度の自主測定を継続
環境マネジメントシステムの構築	33	● 国内工場と研究開発センターの テルモ環境マネジメントシステムへの適合を維持	● 国内工場と研究開発センターが、 テルモ環境マネジメントシステムの維持を継続 ● 国内グループ生産事業所にテルモ環境マネジメントシステムを導入 ● 国内工場と研究開発センター、国内グループ生産事業所に対して、 遵法監査とパフォーマンス監査を実施	○	● 国内工場と研究開発センター、国内グループ生産事業所が、 テルモ環境マネジメントシステムの維持を継続 ● 国内工場と研究開発センター、国内グループ生産事業所の 環境監査を実施
環境法令の遵守	33	● 環境保全に関する法律、条令、協定などの遵守、 海外での法令遵守の確認	● テルモフィリピンズ社の内部環境監査を実施 ● REACHなど海外の化学物質規制への対応準備を開始	○	● 海外事業所の内部環境監査を実施 ● REACHなど海外の化学物質規制への対応を継続

*1 HCFC：代替フロンの一つ、ハイドロクロロフルオロカーボン。 *2 ゼロ・エミッション：廃棄物最終処分量が総排出量の1%未満であること。

コーポレート・ガバナンス／内部統制

テルモは、「開かれた経営」「良き企業市民」であることをステートメント（企業活動規範）に定めています。公正で健全な企業活動を展開し、社会から信頼される企業であり続けるために、「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念のもと、コーポレート・ガバナンスの充実、内部統制の整備に取り組んでいます。

● 健全性・透明性の高い経営体制

取締役、取締役会及び執行役員制

テルモでは、経営の健全性・透明性の向上をコーポレート・ガバナンスの基本としています。「取締役会」は、13名中3名を社外取締役とし、監督機能の強化と意思決定の質の向上を図っています。また、役付取締役を廃止し、取締役は代表取締役と取締役の2区分とし、主に全社的な経営方針の決定や業務の監督にあたっています。一方、執行役員は、職責に応じた職位に基づき、それぞれの業務執行にあたっています。

報酬人事委員会

経営の透明性と客観性を高めるため、取締役候補者の推薦及び取締役の業績評価、報酬案を検討する「報酬人事委員会」を、社外取締役を含む体制で設置しています。

監査役監査及び内部監査

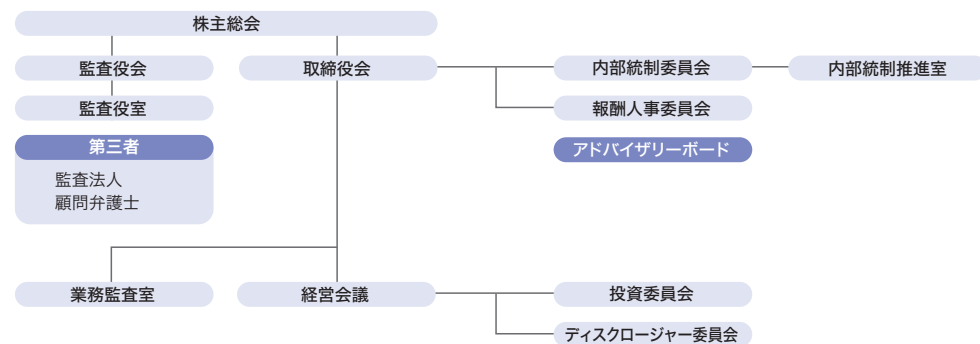
「監査役会」は、4名中2名を社外監査役とし、コーポレート・ガバナンスのあり方と運営状況を確認し、取締役会機能を含

めた経営の日常的活動の適正性の確保に努めています。内部監査部門である「業務監査室」と月1回の報告会を実施し、内部監査の報告を求めるなど、連携を深めています。また、会計監査人に対しては、年7回程度の会合によって、積極的な意見及び情報交換を行うとともに、必要に応じて監査の実施経過の報告を求めるなど、公正な監査が実施できる体制づくりを行っています。

内部統制システムの整備

テルモは2006年、会社法に基づく「内部統制システムの基本方針」に関する取締役会決議を行いました。同基本方針において、テルモの行動規範である「テルモグループ行動規範」の遵守を事業活動遂行の基本に据え、「内部統制委員会」及びその事務局機能を担う内部統制専門部署である「内部統制推進室」が中心となり、コンプライアンス体制、情報の保存管理体制、リスク管理体制、経営の効率性確保体制、テルモグループにおける内部統制システム整備、監査役監査の実効性確保のための体制整備を進めています。

コーポレート・ガバナンス体制図



コンプライアンスへの取り組み

テルモの企業理念である「医療を通じて社会に貢献する」は、企業としてだけでなく、全アソシエイトのめざすところです。医療にかかわる企業としての高い倫理観をもって事業を行っていくために、これからも、法令遵守と企業倫理を軸とした公正な事業活動を進めていきます。

● コンプライアンス推進のしくみ

「テルモグループ行動規範」の遵守

テルモは、企業に求められる社会的要請により深く応えるため、海外を含むテルモグループの全アソシエイトを対象に日常の行動規範を定めた「テルモグループ行動規範」を2008年4月に制定しました。「アソシエイト一人ひとりには公正な事業活動と環境への責任ある行動を展開し、信頼される企業市民の模範とならなければなりません」と宣言するとともに、「誓約書」への署名を実施し、企業倫理の重要性を認識できる環境を整備しています。また、人権の尊重や差別の排除についても明文化し、徹底して取り組んでいます。

コンプライアンス体制

「内部統制委員会」において、コンプライアンスの観点から重要な課題を審議しています。テルモグループ行動規範誓約書への署名、内部通報制度の活用促進、業務監査室による内部監査等を通じたコンプライアンスの強化を図っています。

企業倫理ホットライン「ロバの耳」

「アソシエイト全員で会社を良くしよう」「会社の風通しを良くしよう」というスローガンのもと、内部通報制度として企業倫理ホットライン「ロバの耳」を2003年に開設しました。「テルモグループ行動規範」に照らして気になる内容・状況があった場合、正社員・派遣社員の区別なくアソシエイトが連絡・相談できます。匿名でも電話、メール、封書などが利用できる体制を整え、プライバシー保護や不利益の禁止を徹底しています。

● 生命倫理の尊重

テルモの医療機器・医薬品開発及び評価は、生命の尊厳を第一に考え、関連法や公的指針だけでなく、社内規定を定め、倫理性と科学性の両立を図っています。

研究開発及び製品評価のための動物実験では、2005年の法改正により明確化された3Rの理念^{*1}に加え、4番目のRである「実験責任 (Responsibility)」を果たせるよう、社内に委員会を設置しています。委員会では、社員教育、実験計画の審査、適正な実験実施と終了確認、動物の適正な飼養・管理・自己点検を実行しています。

^{*1} 3Rの理念：Replacement（動物を使用しない研究への代替）、Reduction（動物数の削減）、Refinement（動物の受ける苦痛の軽減）の3項目を充分に考慮・検討した上での研究が重要であると、1959年にRusselとBurchが初めて提言した。日本では2005年、動物の愛護及び管理に関する法律の改正で、その理念が明文化された。

お客様とのコミュニケーション

私たちテルモのお客様は、医療従事者や患者さん、健康や病気に関心のある方々です。
お客様とよりよいコミュニケーションを図りながら
安全で質の高い「人にやさしい医療」の実現に取り組むことは、
医療機器メーカーとしてのテルモの役割であり、責任であると考えています。

テルモメディカルプラネックス®

2002年、「人にやさしい医療」の創造と普及を実現する場所として、総合医療トレーニング施設「テルモメディカルプラネックス」を設立しました。2007年には新棟「イースト」を建設し、医療現場と同等の機能を持つ模擬病院や最新のトレーニング機器、模擬居室を備え、ますます高度化・複雑化する医療に対応したトレーニングが可能となりました。お客様からの関心も高く、利用者はオープンから1年間で1万名にのぼります。また、テルモのアソシエイトと医療従事者が直接コミュニケーションを図れる場として、医療現場のニーズに見合う新たな機器の改良・開発に取り組んでいます。



テルモメディカルプラネックス・イースト

繰り返し検証したりすることで、普段の動作の中に隠れているリスクへの「気づき」を導くトレーニングを多数実施しています。

シミュレータゾーン

新しい医療技術の習得にトレーニングは不可欠です。「シミュレータゾーン」では、脳や心臓の精緻な血管モデル、静脈注射シミュレータなどテルモオリジナルのトレーニング機器などを用いて、高度なカテーテル治療の訓練ができる設備を整えています。医療従事者一人ひとりのスキルアップにつながる、手技の習得に向けた本番さながらのトレーニングを行っています。



脳動脈瘤治療用コイル

医療現場さながらの設備と機能

広大な敷地内に臨床の最前線を再現した設備環境を整え、医師や看護師などの医療従事者とそれらをめざす学生、また、アソシエイトに向けての実践的な教育の場を提供しています。

ホスピタルスタジオ

ICUから手術室、病棟、ナースステーションまで、実際の臨床現場をリアルに再現した設備が「ホスピタルスタジオ」です。医師や看護師の身体にセンサーを付けて動線分析を行ったり、トレーニングを録画した内容を客観的な視点で



病院をリアルに再現

模擬居室

在宅医療の普及が進み、今や医療は病院だけではなく、一般家庭でも行われています。腹膜透析や在宅酸素療法といった生活の場で行う医療の安全性を高めるには、患者さんの生活を理解することが必要です。実際にモニターの方に「模擬居室」で数時間「生活」してもらい、訪問看護スタッフのロールプレイや患者さんへの指導の検証などを実施しています。



在宅医療研修

実践的なトレーニングシステム

充実の設備を利用して、最新の技術を習得してもらうため、注射・点滴、修理メンテナンスから学会等と連携した手技研修まで、さまざまなトレーニングコースを用意しています。

注射・点滴トレーニング

医療現場のヒヤリハット*1事例で約3割を占めているのが、注射・点滴行為です。「注射・点滴トレーニング」とは、日常業務の流れの中で、注射・点滴器具や輸液ポンプを適正に使用するための基礎技術を習得するプログラムです。看護師を中心に年間1,000名ほどが参加しています。



注射・点滴トレーニング

インターベンショントレーニング

患者さんの負担が少ないカテーテルを用いた血管内治療（インターベンション*2）は、高度なテクニックが必要です。経験を積んだ医師の指導のもと、シミュレータを用いながら、治療の基礎やテクニックを習得します。2003年より定期開催している「日本IVR学会夏季学術セミナー」は、日本IVR学会とテルモの共催で、毎回40名ほどの参加があり、現在、学会認定プログラムとなっています。



IVR*3トレーニング

コミュニケーションの幅を広げるMR

医師や看護師など医療従事者とのコミュニケーションを担っているMR*4は、病院を訪問し、製品を正しくお使いいただくための情報や最新の医療情報をお伝えしています。また、医療従事者が抱えている課題やニーズを発掘して社内へ伝え、新たな製品開発や改良へ活かすなど、医療現場とテルモをつなげる大切な役割も果たしています。近年では医療の安全性や効率化といった、医療機関が抱える経営課題にも対応できるような活動にも取り組んでいます。

「テルモメディカルプラネックス」では、お客様に専門的な情報を正しく提供できるプロフェッショナルなMRを育成するための社内教育を行っています。



手術室でのMRトレーニング

Staff Comment

満足していただける
トレーニングの
提供をめざして。

テルモメディカルプラネックス
プログラムマネージャー

星野 早苗



最近では、医療現場で同時に起こるさまざまな出来事を考えて行動する多重課題トレーニングや、急変時対応での医師・看護師・技士などが一緒に行うチーム医療のトレーニングが増えています。知識、技術をもとに、判断から態度へとつながる行動レベルのトレーニングが教育訓練の中では重要であり、自ら気づくことで行動を変化させています。今後は気づきのトレーニングを軸に注射にかかわるトレーナーの養成コースなど、新たなプログラムとして展開させ、お客様に満足していただけるトレーニングの提供をめざしています。

*1 ヒヤリハット：医療従事者がヒヤリとした、ハッとしたなど、一歩間違えば重大な事故になっていたケースのこと。
*2 インターベンション：皮膚に直径数ミリの穴を開け、血管にカテーテルを挿入し、脳や心臓、血管、消化器などの治療を行う低侵襲治療。
*3 IVR：Interventional Radiologyの略。一般的に放射線診断技術の治療的応用を指す。エックス線透視や超音波画像、CTを見ながら、体内にカテーテルなどを入れて行う治療法のこと。
*4 MR：Medical Representativeの略。医療機関向けの情報担当者。

お客様とのコミュニケーション

● お客様の声に耳を傾ける

テルモ・コールセンター

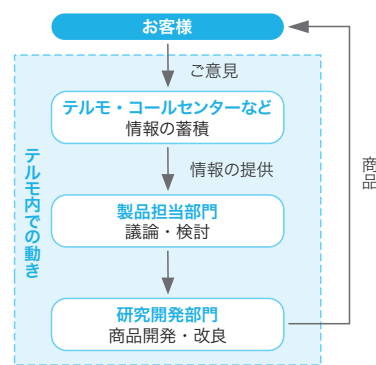
「テルモ・コールセンター」には、一般のお客様や患者さん、医療機関、代理店のみなさまから、1日約1,500件にのぼる電話でのお問い合わせをいただいています。テルモの製品は医療機関向け、一般向け、在宅医療向けなどさまざまですが、一つひとつのお問い合わせにすばやく、的確に回答するため、分野ごとに専門のコミュニケーターが対応しています。

新しく着任したコミュニケーターは2週間から4週間にわたる研修を受けます。その後も年2回、モニタリングチェックやレベルテストを受けたり、新しい知識を習得したりと研鑽を積んでいます。お客様にご満足いただけるコミュニケーションの維持・向上に努めるとともに、在宅医療の患者さんなど緊急性が高い分野のお問い合わせに関しては、24時間対応しています。



専門知識を持つコミュニケーターが対応

お客様からの声をフィードバックする流れ



● 製薬企業とのコラボレーション

テルモが製品を販売する取引先は、病院や代理店だけではありません。世界各国において、製薬メーカーと協力し、医療機器と医薬品のコラボレーションに取り組んでいます。

例えば、テルモヨーロッパ社では、世界の大手製薬企業約20社以上と取引先を行っています。テルモは針・注射器・その他セーフティ機構付きの医療機器を安定的に取引先に供給し、製薬企業はそれらを薬やワクチンに同梱して医療機関や自己注射を行う患者さんのお手元に届けます。

テルモ製品の高い品質と安定供給への実績が評価され、2007年4月には、ワイス社英国法人より、「ベストサプライヤーアワード2007」を受賞しました。

今後も、「ドラッグ&デバイス」の考え方のもと、さまざまな形でお客様への価値を提供していきます。



テルモヨーロッパ社B to Bチームのメンバー

● お客様の声を製品へ活かす

テルモに寄せられた声や得られた製品ニーズは社内へフィードバックし、製品開発における重要な指針として蓄積しています。また、定期的に議論・検討を行いお客様の声を具体的な製品開発に結びつけています。

安全で使いやすい製品

医療の安全性を高めることは、テルモの重要な役割だと考えています。ミスや事故の起こりにくい機器の開発で、医療の効率化を推進し、治療の中に潜むリスクを減らします。

● セーフゲート®機構付き輸液剤

テルモでは、点滴の際、必要な薬剤を混合し忘れることを防止するため複数の液剤をあらかじめ一つの容器に入れる「ワンバッグ化」に取り組んできました。しかし、ワンバッグ化することで、薬液を分割している隔壁を開通せずに点滴をすると、正しい薬液の投与ができないという新たなリスクが出てきました。そこでバッグの隔壁を開通しない限り薬液が投与されない独自の容器構造「セーフゲート」を採用した「アミノ酸・ビタミンB₁加総合電解質液」を開発し、2006年から販売しています。また、ビタミンB₁をあらかじめ配合しているので、欠乏症の低減が期待できます。医療従事者の作業負担の軽減や効率化にもつながります。



独自の容器構造「セーフゲート®」

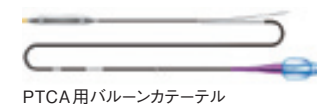
身体への負担が少ない製品

カテーテルなどによる低侵襲治療は、一般的な手術に比べて患者さんの身体的なダメージを最小限に抑え、精神的な苦痛や経済的な負担を軽減します。

● PTCA用バルーンカテーテル

これまでのPTCA用バルーンカテーテル*1は、血管の太さや詰まり方に応じて異なるカテーテルを使い分ける必要があり、一人の患者さんに数本を使うこともめずらしくありませんでした。テルモでは素材やバルーンのたたみ方などを改良し、幅広いタイプの治療に対応できるPTCA用バルーンカテーテルを開発。一人の患者さんに少ない本数で

治療することが可能となり、手術時間の短縮によって患者さんのからだへの負担が少なくなるだけでなく、医療経済性にも優れた製品です。



PTCA用バルーンカテーテル



風船部分を細くしながら柔軟性や押し拡げる力を向上

家庭と医療をつなぐ製品

在宅で治療を続けるための医療機器は、安全・安心であること、そして使いやすいことが大切です。テルモは、常に患者さんの視点に立った開発を進めています。

● 酸素濃縮装置

必要な酸素を肺に取り込めない慢性呼吸不全の患者さんは、酸素濃縮装置を使用し、在宅での酸素療法を行っています。この装置は電源を必要とするため、患者さんからは災害時の停電などによる不安の声があげられていました。

そこでテルモでは、バッテリーを内蔵した在宅用酸素濃縮装置を、2007年より販売開始しました。最長約2.5時間の使用が可能になり、一時的な停電には自動で切替運転になります。音声ガイダンス機能も搭載し、「バッテリーが少なくなりました」「設定流量は3リットルです」など、操作内容や各種警報を音声でお知らせします。



バッテリー搭載で患者さんに安心を

*1 PTCA用バルーンカテーテル：カテーテルの先端に装備したバルーン（風船）を膨らませて血管を押し拡げ、狭まった血液の通路を拡張するために使用する医療機器。

安全・安心な品質への取り組み

品質を守ることは医療にかかわる企業の重大な責務であり、テルモの企業価値を根底で支えています。お客様により安全に、安心してお使いいただくためにテルモでは、製品の品質にサービスの品質を加えた総合品質の向上に、全アソシエイトが取り組んでいます。

● 国際規格に適合した品質保証体制

1995年、ヨーロッパの医療機器指令に対応するため、規制の厳しい国際規格に適合した品質マネジメントシステムを構築しました。既存の医薬品GMP^{*1}をベースにした高度な品質保証体制に加え、グローバルな要求に適合するシステムを融和させたものです。後年、ISO13485^{*2}の認証を取得しています。国際規格や改正薬事法は次々と発行・改訂されていますが、その要求を先取りする形で品質マネジメントシステムの継続的な改善に努めています。



工場での厳しい品質管理

● 安全・安心を追求する品質方針

品質マネジメントシステムの構築と実施、その有効性の維持のため、経営者が自ら品質方針を設定しています。各部門はこの方針に基づいて品質目標を設定し、トップの方針がアソシエイト一人ひとりの目標に落とし込まれていきます。

品質方針

- 私たちは、医療の現場に安全と安心をお届けするため、
- お客様にとって価値ある製品を追求します。
 - 品質システムにおける自らの役割を理解し、実践します。
 - 仕事の進め方を常に見直し、改善します。

2004年6月30日 テルモ株式会社
代表取締役会長 和地 孝
代表取締役社長 高橋 晃

● 高品質を守り抜く監査体制

品質を維持・向上させるため、品質マネジメントシステムが適切に遵守・運用されていることを客観的に評価する内部監査を実施しています。監査はトレーニングを積み一定の基準に達したアソシエイトが行います。結果は経営者に報告され、改善指摘を受けて品質マネジメントシステムの継続的な改善を続けます。さらに薬事法をはじめ欧米各国から全世界に拡大しつつある規制や、取引先企業の個別要求事項への適合を証明するため、年に数回の外部監査を受けています。

● 全部門が参加する総合品質会議

テルモがめざす究極のゴール「お客様の不満ゼロ」のために、2007年4月から「総合品質会議」をスタートさせました。製品の開発・生産に直接かかわる部門にとどまらず、全アソシエイトが自分の仕事における品質を向上させるため、基本である社内のコミュニケーションの改善から始め、今ではすべての支店・工場で同じ情報を共有できるラインができています。お客様の声に迅速に、真摯に対応すること、そのためにはどうすればよいかを真剣に考えています。

● 海外でも厳しい品質管理を実施

海外工場の役割が増す今、国内で培った品質向上のノウハウを現地アソシエイトに伝える一方、体系的な考え方や標準化といったシステム面の多くを彼らから学んでいます。相互交流を続ける中、国内で独自に発展した評価手法の「初期流動品質確認^{*3}」が、海外工場でも「Shoki-Ryudo」として導入され始めました。

*1 医薬品GMP：原料の入庫から製造、出荷までのすべての過程で製品が安全につくられ、品質を保つために定められた規制システム。
*2 ISO13485：医療機器の品質保証のための国際標準規格。
*3 初期流動品質確認：新製品を量産移行する際に、品質の不具合の有無や製品仕様などを再度確認する品質管理。

株主・投資家への責任

テルモは、株主や投資家の方々とコミュニケーションを通じて「開かれた経営」に努めています。高い透明性を保ち、フェアな情報開示を行うとともに、テルモの事業や製品だけでなく、医療を深く理解してもらえるように、さまざまな工夫をしています。良き企業市民として、分かりやすく質の高いコミュニケーションをめざしています。

● テルモファンを広げる株主総会

2007年6月に開催した定時株主総会では、創立から85年の歩みをつづった「テルモの軌跡」を上映しました。売上や利益などのデータ以外に、商品や技術がどのように医療に貢献しているのかについても解説をしました。また、初の試みとして商品展示コーナーを開設し、間近にご覧いただきました。



株主総会での商品展示

● 個人投資家向けセミナーを開催

経営者やIR担当者が、直接ふれ合う機会の少ない地域で、個人投資家向けのセミナーを行っています。2006年秋には神戸・倉敷で、2007年は福岡・長崎で開催し、多くの方々からテルモに対する期待の声をいただきました。

また、2008年4月には東京証券取引所が主催する「東証IRフェスタ2008」にも参加しました。医療機器を実際に手に取れる商品展示コーナーでは、テルモへの理解を深めてもらうことができました。

● 「2007年度IR優良企業賞」を受賞

日本インベスター・リレーションズ協議会が主催する「2007年度IR優良企業賞」を受賞しました。2003年に引き続き4年ぶり2回目の受賞となります。この賞は優れたIR活動^{*1}をしている企業を選定されるもので、2007年度は358社中、テルモを含め7社が選ばれました。この受賞を励みに今後もみなさまのお役に立つIR活動を展開します。

*1 IR活動：企業が株主や投資家に対し、投資判断に必要な企業情報を公平にかつ継続して提供する活動のこと。

● 投資判断に役立つIR情報の開示

テルモは、自社ウェブサイトにてIR情報を開示しています。個人投資家のみなさまの投資判断に役立つような、コンパクトで分かりやすい財務情報の開示をめざしています。

「テルモ四季報」を公開しています

株価情報や業績などの投資判断に必要な企業情報をはじめ、製品の説明や基礎的なIR用語などを自社でまとめた「テルモ四季報」を、2004年6月よりウェブサイトに掲載しています。この取り組みはビジネスモデル特許取得に向けて申請中です。



WEB <http://www.terumo.co.jp/ir/shikiho/>

Staff Comment

株主・投資家の方とのコミュニケーションは私たちの責任です。



総務部
伊藤 隆生

株主や投資家の方々とコミュニケーションを通じて、当社の長期的な企業価値向上に向けた取り組み、すなわち、企業理念「医療を通じて社会に貢献する」を実現するための取り組みをご理解いただき、テルモを長期にわたりご支援いただくことをめざしています。そのためにも、当社の取り組みに限らず、特に一般の方にはなじみの薄い医療そのものについてもより深くご理解していただくような取り組みも重要であると考えています。

アソシエイトの成長を支える制度

テルモでは、社員を「アソシエイト」と呼んでいます。
アソシエイトとは常に自らの能力を高め、主体的に考えて行動し、テルモの発展に貢献する人のこと。
テルモの価値はアソシエイトの価値の総和です。
アソシエイトは自分を磨き、会社はその能力を最大限に発揮できる場を提供します。

● 独自の人事制度で挑戦をサポート

ACE面談 (自己申告・キャリア面談)

年1回、課長クラス以下の全アソシエイトを対象に、自分の強み・弱み、将来のキャリアプラン、成長プランなどを上司と一対一で話し合う「ACE^{*1}面談」を実施しています。面談で話し合う内容は、社内ウェブサイトにも本人・上司が入力し、そのデータは、能力評価や人事異動、育成に活かしています。

ACE公募 (社内人材公募)

「やりたい仕事で能力を最大限に発揮する」ために、「自分の仕事は自分でつかむ」という考えのもと、「ACE公募」を導入しています。制度がスタートしてから延べ250名以上の応募があり、約90名の人事異動が実現しました。先ごろ募集したBRICs^{*2}駐在員候補には30名近くの応募の中から7名が合格を勝ち取りました。

Staff Comment

「ACE公募」に合格し、
営業から経営企画室へ。
新たな経験を積んでいます。



経営企画室 (BRICs候補生)

新保 雄介

「ACE公募BRICs候補生」に応募した理由は3つあります。海外での勤務に興味があったこと、営業職以外の経験も積みかけたこと、そしてチャレンジできる環境に身を置きたいと思ったことです。チャレンジャーとしての仕事は自分を成長させるだけでなく、財産となる経験が積めるチャンスでもあります。BRICsに限らず、会社にとっての今後の課題は積極的なグローバル展開ですので、語学はもちろん、経営に対する感覚を磨き、さらなる活躍の場を広げていきたいと思っています。

クロスローテーション (異分野ローテーション)

異分野で試行錯誤しながら得られた経験や気づき・視野は、アソシエイトを大きく育てるものだと考えています。テルモでは、若手から管理職を対象に、生産から営業、営業から本社部門など、あえて異分野を経験させる「クロスローテーション」を実施しています。また、昇格試験でも、「異分野経験」を受験資格の一つとしています。

立候補・選抜研修

テルモの研修は「仕事で成果をあげたアソシエイトが自らの意思や会社の推薦で参加する立候補・選抜研修」制度をとっています。

また、座学だけではなく実践の場を提供することが重要であると考え、次世代の経営人材育成を目的とした選抜研修「LEO^{*3}セミナー (平均年齢40歳・約30名/年)」、「LEOセミナー Jr. (平均年齢30歳・約30名/年)」では、セミナー修了後に異分野ローテーションを行うことを原則としています。すでに200名以上の卒業生がさまざまな部署で活躍しています。



「LEOセミナー」は次世代を担う若手が、自らの意志、会社の推薦で参加する

● 現場の力を高める社内制度

現場の誇り賞

全世界のアソシエイトを対象とした業績表彰制度「グローバルアワード」があります。しかし、会社を支えているのは高い業績結果を出す部門のアソシエイトだけではなく、地道な

努力を続けるアソシエイトの貢献が非常に大きいと考えます。そこで、アソシエイトの地道な功績を称える「現場の誇り賞」を創設しました。現場の推薦を受けた数百名の候補者の中から5～6名が選出され、毎年9月に表彰式を開催しています。



2007年「現場の誇り賞」受賞者

社内留学

他部門の業務を体験し、視野を広げる「社内留学」制度を導入しています。「人事異動以外にも、他部門を知る機会がほしい」というアソシエイトの声を反映し、制度化したものです。本社や研究部門のアソシエイトが営業現場を体験してお客様の反応を直に感じたり、生産の現場で働くアソシエイトが別の工場へ赴くことで、新たな技術を身につけられるといったメリットがあります。1週間～半年程度の社内留学により、部門間のコミュニケーションを円滑にする効果も生まれています。

臨床基礎研修・営業体験

総合医療トレーニング施設「テルモメディカルプラネックス」(→P15)をアソシエイトのスキルアップにも活用し、営業職(MR)のための高度な「臨床トレーニング」から、新入社員を対象とした「臨床基礎研修」まで、常に現



テルモメディカルプラネックスで臨床の基礎を学ぶ新入社員研修

場の視点・お客様の視点で考える風土を醸成しています。また、研究・技術系の新入社員には5カ月間の営業実習、スタッフ部門の社員には1週間程度の営業現場体験(営業同行研修)なども行っています。

商品アイデア提案制度「Think-!」

アソシエイトが商品やビジネスモデルなどのアイデアを提案できる制度「Think-!」(シンク-アイ)を、1999年に導入しました(「アイコン」から2007年より名称変更)。過去2万件以上の提案のうち、商品化が検討されているアイデアは500件にのぼり、すでに商品化が実現したアイデアは30件以上になります。

海外工場アソシエイトの国内研修

海外工場のアソシエイトが、日本国内の各工場で、生産技術や生産管理を学ぶ研修制度「T3^{*1}」を導入しています。JITCO^{*2}を活用し、2007年度は、杭州工場(中国)より43名、長春工場(中国)より23名、フィリピン工場より105名の研修生を受け入れ、組み立てや包装などの工程作業、危険予知、トータルプロダクトマネジメントなどをトレーニングしました。

この研修は1995年のスタート以来、受け入れ人数は延べ950名にのぼります。テルモの「人を軸とした経営」は、海外事業所においても実践されています。



日本に研修に訪れた杭州工場生。これまで延べ950名が来日している

*1 ACE: Associate, Challenge, Educationの略。アソシエイト一人ひとりがテルモの「エース」になってほしいという思いも込めている。
*2 BRICs: 新興途上国であるブラジル(Brazil)、ロシア(Russia)、インド(India)、中国(China)の4カ国の頭文字を取った略称。
*3 LEO: Leader Executive Organizationの略。ライオン(経営者)に成長するポテンシャルのある「レオ」という意味も込めている。

*1 T3: Technique Transfer Training(技術伝承研修)の略。
*2 JITCO: 財団法人 国際研修協力機構(Japan International Training Cooperation Organization)の略。法務、外務、厚生労働、経済産業、国土交通の5省共管により1991年に設立された公益法人。外国人研修生・技能実習生の受け入れについてあらゆる相談に応じ、受け入れ事業を進める団体・企業等への支援業務を行っている。

地域社会への貢献と交流

医療従事者や患者さんへ、優れた製品やサービスを提供して医療に貢献するだけでなく、事業活動に関連する情報提供や災害支援など、地域社会への貢献にも重点的に取り組んでいます。社会と共生する良き企業市民をめざし、役割を果たせるよう、これからも努めていきます。

● 病気の予防に役立つ情報を提供

全国各地の「テルモ健康天気予報」

2004年より、その日の天気や気温が日々の健康状態や疾病に与える影響を予報する「テルモ健康天気予報」をテレビ、ラジオ、ウェブサイトで紹介しています。関節痛や紫外線といった従来の予報内容に加え、2007年からは新たに天気と血圧の関係についての予報も開始しました。



WEB <http://kenkotenki.jp/>

健康情報番組「カラダのキモチ」

2006年より、テレビの健康情報番組「カラダのキモチ」を提供しています。からだの症状に応じた予防・改善法や簡単なエクササイズなど、身近な生活上のテーマを取り上げ、健康な毎日を送るためのヒントをお届けしています。また、「テルモ健康天気予報」も番組内で紹介しています。

週刊! 健康カレンダー「カラダのキモチ」
毎週日曜日 朝7:00～7:30 CBC/TBS系列 全国28局ネット放送

● 生活習慣病予防セミナーを開催

生活習慣病を予防するには、日々の自己管理が大切です。テルモでは、ウェブサイトやパンフレットなどを通じて健康に関する情報を発信するほか、2005年度からは一般の方を対象とした「生活習慣病予防セミナー」を開催し、延べ5,000名の方が参加しました。



一般の方を対象にしたセミナーが好評

● 災害における緊急支援活動

医療機器や医薬品の不足が深刻な自然災害の被災地へ、医療機器などの緊急支援物資を提供しています。

四川大地震の被災地へ機器を寄贈

2008年5月に中国四川省で発生した地震では、医療機関も大きな被害を受け、医療機器や医薬品が不足しました。テルモでは現地で緊急に必要とされている輸液セット約22万5,000本と血液バッグ5,000個(総額3,600万円相当)を寄贈しました。支援物資に中国語の取扱説明書を封入するなど、現地で混乱のないよう配慮しました。



四川の被災地に緊急支援

● 地域や社会との共生の取り組み

医療の発展を願った基金や助成金のほか、地域住民や地域社会の理解を深める活動を進めています。

テルモ科学技術振興財団

「財団法人 テルモ科学技術振興財団」は、生命科学にかかる素材、生物工学、病態生化学など、科学技術に関する研究への助成を行い、振興を図っています。

設立20周年を迎えた2007年7月には、テルモメディカルプラネックスで記念式典が開催されました。式典では、2007年度の研究助成の選考結果の報告や感謝状・助成金の贈呈式、講演会が行われました。

WEB <http://www.terumo.co.jp/zaidan/>

中国の医療の質向上をめざす「テルモ基金」

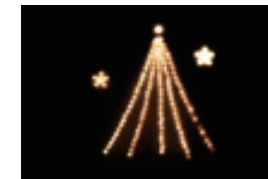
2007年、中国浙江省杭州工場(テルモ医療産品(杭州)有限公司)の操業10周年を機に、少しでも多くの人が医療の恩恵を受けられるようにと浙江大学に「テルモ基金」を創設しました。西洋と東洋の医学を融合した新しい医療の創造をめざす研究への助成を行うほか、優秀な学生を対象に奨学金を寄贈し、中国の医療の質向上に貢献します。

「テルモ基金」概要

基金名	泰尔茂基金
基金内容	「泰尔茂研究助成基金」と「泰尔茂奨学金」
基金総額	年間50万円×3年間=150万円
運営期間	2007～2009年

ホスピスへクリスマスイルミネーションの贈りもの

テルモ湘南センターでは、クリスマスの約1週間前からアソシエイトが自主的にチームを組んで同センターの外壁にイルミネーションの飾りつけを行い、クリスマス(12月25日)には火花を打ち上げています。この企画は同センターの向かいにあるホスピスに入院されている患者さんやそのご家族、地域住民の方々にクリスマスを楽しんでいただきたいとの思いから、1997年より毎年実施しています。



アソシエイトが飾りつけをしたクリスマスイルミネーション

小学生向け会社見学会を実施

テルモ本社では2005年から、近隣の小学校の児童を対象に会社見学会を実施しています。2007年10月の見学会には小学2年生25名と保護者5名が参加しました。実際に製品を手にと

て体感してもらうなど、楽しみながらテルモを理解してもらうきっかけになりました。

テルモ体温研究所の公開授業

テルモ体温研究所*1では、体温とからだの関係や知識を広めていくため公開授業を実施しています。2008年6月、横浜市立宮谷小学校の5年生31名を対象に、朝食を食べる前後のからだの心の変化や正しい検温の仕方を伝えました。



子どもたち自身が体温の変化を調べ、発表を行った公開授業

WEB <http://www.terumo-taion.jp/>



Guest Comment

充実した授業内容で子どもたちの健康に対する意識が変わりました。

横浜市立宮谷小学校

柴崎 美佐 先生



子どもたちはサーモグラフィに表れた朝食前後の体温変化や、朝食によって集中力や記憶力がアップしているグラフを見て驚いていました。学習後、各自がまとめたパンフレットにはテルモの方から見せていただいたグラフを示している子どもが多く、「全校のみんなに教えてあげたい」と朝食の大切さを読み手に伝えようとしていました。自分のからだで感じた変化を科学的に裏付けしていただいたことで、理解が深まったようです。

*1 テルモ体温研究所: 体温から健康を考え、体温情報の提供や新しい健康生活を提案するテルモの研究所。

環境にやさしい事業活動をめざして

「人にやさしい医療」と「環境にやさしい医療」の調和をめざすテルモでは、環境基本方針や環境マネジメントシステムを整備し、地球環境との共生に積極的に取り組んでいます。これからも医療の安全と環境の調和を追求し、「人にも環境にもやさしい医療」を実現していきます。

● 環境基本方針で環境保全の意識を共有

「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念に基づき、1997年に「環境推進室」を設置し、1999年に「環境基本方針」を制定しました。その方針のもと、医療分野のリーディング企業として地球環境の保全に取り組んでいます。創立85周年にあたる2006年には、最も大切に基本的な考え方を「テルモのこころ」(→P6)としてまとめ、その中でも「地球環境を守ることがテルモの事業活動の前提です」と改めて宣言しています。

環境基本方針

私たちテルモグループは、企業理念「医療を通じて社会に貢献する」のもと、医療の安全と安心を提供することを基本に、リーディング企業として責任ある環境保全活動を展開し、信頼される企業市民をめざします。

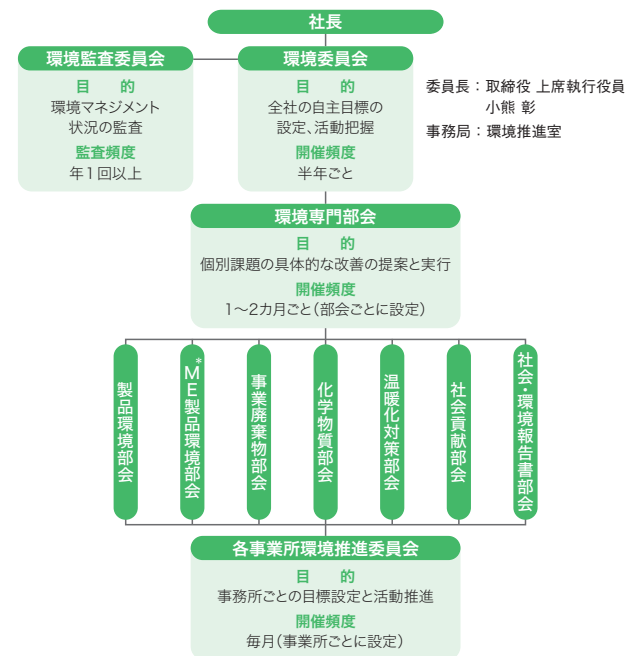
1. 自主的な目標を設定し、環境保全活動に努めます。
 - ・ 事業が環境へ与える影響の把握
 - ・ 環境に配慮した商品開発
 - ・ 環境汚染の予防
 - ・ エネルギーや資源の有効活用
 - ・ 廃棄物の削減など
1. 各国の環境保全に関する法律、条例、協定等を遵守します。
1. 環境保全に関する推進体制を設け、推進・監査に努めます。
1. 社会や地域の一員として環境保全活動への支援、協力に努めます。
1. 社内広報活動や教育を行い、社員の環境保全に関する意識の向上に努めます。

制定 1999年12月

● 環境マネジメントシステムを整備

ISO14001^{*1}の本質であるPDCAサイクル^{*2}に焦点をあてた、効率的で実効性のある環境マネジメントシステムを整備し、環境パフォーマンスの向上に取り組んでいます。環境管理の最高決定機関である「環境委員会」は、全社における環境保全の施策や目標を設定し、活動状況の把握などを半期ごとに行っています。また、「環境監査委員会」は、各事業所に対して内部監査を行い、システムの有効性や運営状況を確認しています。その活動内容は毎年「社会・環境報告書」で公表し、透明性の高い経営・組織体制の維持に努めています。

環境管理全社推進組織



* ME : Medical Electronics (医用電子機器) の略。

*1 ISO14001 : 組織活動や製品、サービスにおける環境負荷の低減などを実施する環境マネジメントシステムの構築に要求される国際的な標準規格。
*2 PDCA サイクル : Plan (計画)、Do (実行)、Check (評価)、Act (改善) の4つのプロセスを反復させ、継続的な業務改善を図るマネジメントサイクル。

環境意識を高めるコミュニケーション

「社内広報活動や教育を行い、社員の環境保全に関する意識の向上に努めます」と、環境方針で定めている通り、環境意識を高めるために、研修や環境表彰などを通じてアソシエイトとのコミュニケーションを深めています。さらにアソシエイトの家族を含めた野外環境活動などによって社外とも交流を図っています。

● 「グリーンプロジェクト」が発足

アソシエイトが主体となり、環境に配慮した製品開発や包装材料の省資源化といった環境戦略の立案・提案を行う「グリーンプロジェクト」が、2008年5月に発足しました。全社員からエコアイデアを募集する「Think-! ECO」などさまざまなテーマを推進中です。

● アソシエイト向け環境研修を実施

新人アソシエイトを対象に環境研修を年1回実施し、環境基本方針やテルモの一員として行うべき環境活動への理解を深めています。また、2008年2月には内部監査員及び各事業所エネルギー担当者を対象に実務者研修を実施。財団法人「省エネルギーセンター」より小林 彰氏をお招きし、省エネルギー法について研修を行いました。

● 社内の環境保全活動を表彰

1999年度から、環境保全に著しい成果をあげた施策や活動を表彰する社内表彰制度を設立。2003年度からはテルモグループ全体の制度となりました。

表彰年度	表彰名	表彰グループ及び件名
2007年度	ブロンズ賞	事業廃棄物部会「資源の有効利用促進」 甲府東工場 生産部 保全課 植松 正志 「甲府工場省エネルギー促進」(→P29)

● 環境意識を高める愛鷹工場掲示板

愛鷹工場では、2002年から「環境掲示板」を設置し、月1

回更新しています。エネルギーや廃棄物などの工場環境負荷情報や地球温暖化のしくみ、家庭でできる省エネ情報などを、グラフやイラストを用いて分かりやすく紹介しています。情報の提供と共有、環境意識の醸成に役立っています。



愛鷹工場の環境掲示板

● 「テルモ富士山森づくり」を推進

テルモは静岡県富士宮市の2工場で、富士山麓から湧き出る地下水を利用して医療機器や医薬品などを生産しています。良質な水を育む富士の自然を守るため、2003年からNPO法人「富士山自然の森づくり」と共催し、「テルモ富士山森づくり」を推進しています。

Guest Comment

今までの経験を活かし、
本当の自然の中での森づくりを
ともにめざしていきます。

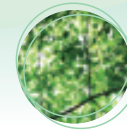


NPO法人「富士山自然の森づくり」

中島 利男 理事

共催というかたちで森づくりを始めて、2008年で6年目を迎えます。今まではシカなどの食害がない環境での森づくりでしたが、今年からは本当の自然の中での森づくりに挑戦していきたいと思います。今までの経験を活かした、新しい場所での森づくり。企業として、また参加者一人ひとりが自然環境の保全にどう取り組んでいくべきかを考えながら、今後の活動の中にもとに学んでいきたいと思っています。

環境に配慮した製品



テルモでは、安全に配慮した設計と、環境への負荷を低減する製品開発に努めてきました。医療従事者の方や患者さん、そして地球環境にもやさしい製品の開発に取り組み、これからも社会のニーズに応える努力を続けていきます。

● 人にも環境にもやさしく

テルモは、感染リスクや取り扱いの作業負担を軽減するために、形状や素材の改良を重ね、安全性の高い製品を開発してきました。人にやさしい医療を追求することは、環境にやさしい医療の実現にもつながります。

1981年 ソフトバッグ入り輸液剤

焼却時にダイオキシンなどの有害ガスが発生するとされるPVC(塩化ビニル)からEVA*1にバッグの材質を変更し、脱塩ビ化を図りました。さらに、複数の薬剤をワンバッグ化し、薬剤の混注時に出るゴミを削減しました。2004年には、「高カロリー輸液用総合ビタミン・糖・アミノ酸・電解質液」が「エコプロダクツ大賞推進協議会会長賞」を受賞しました。



ソフトバッグ入り輸液剤

1983年 電子体温計

体温計とともに歩んできたテルモでは、1983年、国産としては初めての予測式電子体温計の発売を開始しました。また、ガラスの破損による水銀汚染の問題を解決するために、水銀体温計の生産を1985年に終了しています。



電子体温計

1991年 輸液セット

非塩ビ製素材のポリブタジエンのチューブを使用した輸液セットの販売を開始しました。この非塩ビ製素材は、薬剤吸着*2や焼却時の有害ガスの発生がなく、精巣に対する影響(精巣毒性)が懸念されている可塑剤DEHPも使用していません。さらに2003年からは、代替可塑剤TOTM*3を使用した輸液セットも発売しています。



輸液セット

1998年 製品包装

製品の包装材においてもPVC(塩化ビニル)の使用を止め、紙やポリエチレン系フィルムなどに変更することで脱塩ビ化を図りました。また、包装自体を小型化し、輸送時の負荷を抑えることで、二酸化炭素排出量削減に取り組んでいます。

1998年 シリンジ

容量と機能性はそのままに、シリンジ*4の小型・軽量化を実施しました。これにより、廃棄時の重量は従来に比べて25%削減となりました。また、製品材料の省資源化や、輸送時の二酸化炭素排出量削減にも結びつきました。



シリンジ
シリンジ廃棄量の比較
(左：従来のシリンジ、右：新しいシリンジ)

1999年 プレフィルドシリンジ(薬剤充填済注射器)

安全性と使いやすさを追求し、あらかじめ薬剤を充填した一体化のシリンジを開発しました。感染リスクの低減や、医療従事者の作業負担の軽減を実現しました。また、従来は薬剤を注入する際に発生していたゴミの削減にもつながりました。



プレフィルドシリンジ

1999年 腹膜透析(CAPD)液用バッグ

国内で初めて、腹膜透析液のバッグ素材をPVC(塩化ビニル)からPP(ポリプロピレン)に変更しました。材質の変更以外にも、フィルムの厚みを薄くすることや、排液バッグの包装をなくすことなどにより、省資源・軽量化を図り、輸送時の負荷を軽減しました。廃棄重量も40%削減しました。



腹膜透析液用バッグ

2003年 酸素濃縮装置

酸素濃縮装置は、患者さんがご自宅で酸素を吸入するため長時間使用することも多いので、酸素発生プロセスの効率化により、酸素収率*1を向上させ、従来よりも小形のコンプレッサーによる省電力化を実現しました。



酸素濃縮装置

2006年 電子血圧計

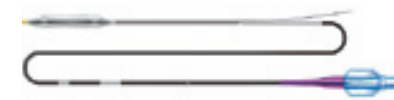
医療現場の脱水銀を進めることを目的に開発された電子血圧計です。今回はさらに環境への配慮を深め、鉛はんだなどRoHS指令*2で定められている特定の有害物質を規制値以上含まないRoHS指令適合機器として販売しています(現在、医療機器に対して、RoHS指令は適用されていません)。



RoHS指令適合電子血圧計

2007年 PTCA用バルーンカテーテル

血管の太さや詰まり方に幅広く対応できるPTCA用バルーンカテーテルの販売を開始しました(→P18)。幅広い症例に対応できるようになったため、カテーテルの種類や使用本数が削減でき、省資源化に貢献しています。



PTCA用バルーンカテーテル

*1 EVA: エチレン酢酸ビニル共重合体。
*2 薬剤吸着: 薬剤の有効成分が、輸液セットの素材に吸着して、投与量が少なくなってしまう現象。
*3 代替可塑剤TOTM: 可塑剤DEHPに比べて、投与量と同じ場合に精巣毒性が低い、また、薬剤・血液などへの溶出量も極めて少ない可塑剤。
*4 シリンジ: 注射器本体(注射筒)。

*1 酸素収率: 原料となる空気から、何%の酸素を供給できているかという指数。
*2 RoHS指令: Restriction of the use of certain Hazardous Substancesの略。鉛、水銀、カドミウム、六価クロム、PBB、PBDE(臭素系難燃剤)の6つの有害物質を規定値以上含む製品の販売防止を目的とした指令。

地球温暖化防止のために

「地球環境を守ることがテルモの事業活動の前提です」と「テルモのこころ」で宣言している通り、二酸化炭素の削減をさらに推進するため、2007年度に削減目標を見直しました。また、「チーム・マイナス6%」参加や「ECOチャレンジ」による全員参加型の活動で、地球温暖化の防止に向けて全力で取り組んでいます。

● より積極的な削減目標を設定

2008年度より、二酸化炭素排出量の削減目標を見直し、製品売上高原単位で1990年度比25%削減から50%削減に目標を引き上げて、活動を開始しました。

● 二酸化炭素の排出を抑える取り組み

2007年度は、高効率ターボ冷凍機の通年運転、蒸気トラップの漏れ防止対策など、きめ細かい省エネ活動に取り組みました。その結果、製品売上高あたりの二酸化炭素排出量が2006年度より8%削減でき、1990年度と比較すると35%の削減を実現しました。しかし、輸出増加に伴う生産量の増加によって、国内工場の二酸化炭素排出量そのものは、2004年度までの減少傾向から横ばいに転じています。今後は、ガスから二酸化炭素排出量の少ない電力への燃料転換を進め、排出量の削減に努めていきます。

富士宮工場 ～蒸気トラップの漏れ対策

富士宮工場では、熱源として利用する蒸気を運ぶための配管が工場の隅々まで行き渡っています。蒸気が冷えてできるドレン(凝縮水)を取り除くため、配管の約400カ所に蒸気トラップをつけていますが、長期間使用すると正常に作動できず、蒸気までも排出してしまうことがありました。そこで2007年度は蒸気トラップの点検をこまめに行い、漏れやすい箇所を特定して点検頻度を高くしたところ、工場全体のエネルギー使用量の約0.5%相当を削減できました。

研究開発センター ～人感センサー付き非常用照明器具を導入

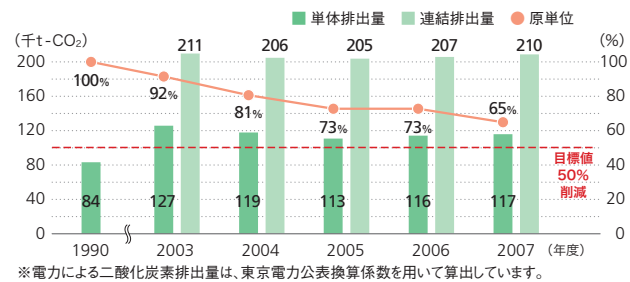
これまでの消防法では、階段通路の照明は常時点灯が義務

づけられていました。しかし、消防法の一部規制緩和と、階段通路の照明用非常バッテリーの更新時期に合わせ、人感センサーによる点灯方式の非常用照明器具に変更しました。これにより、年間電気使用量を54,534kwh削減できました。

二酸化炭素排出量削減目標

2012年度までに、二酸化炭素排出量を製品売上高原単位で1990年度比50%削減

二酸化炭素排出量と製品売上高原単位の推移



Staff Comment

電気式と蒸気式の冷凍機を効率的に同時運転させ、工場内の省エネを実現。

甲府東工場 生産部 保全課

植松 正志



甲府工場では電気で冷水をつくる高効率ターボ冷凍機を導入し、従来の蒸気で冷水をつくる吸収式冷凍機との同時運転を行いました。導入前に繰り返しシミュレーションを行ったものの、実際は内部抵抗の少ない吸収式冷凍機の方へ冷水が流れ、効率的な運転ができていませんでした。このため、温度設定の見直し、冷水ポンプのインバーター設定の工夫を行うことで、生産工程への冷水供給責任を果たし、効率的な同時運転で年間1,659kl(原油換算)の省エネを実現できました。

● 物流の環境負荷削減に向けて

製品を輸送する際のエネルギー使用量の削減は、地球温暖化防止の重要なテーマの一つです。輸送効率の高い委託輸送や、海上輸送などのモーダルシフト*1によりエネルギー使用量を削減したほか、物流拠点の統廃合を行い、効率的な物流の取り組みを行っています。これからも、荷主として効率的な物流インフラの整備に努め、二酸化炭素の排出を削減していきます。

モーダルシフトの推進

テルモでは、モーダルシフトを推進しています。富士宮工場では福岡倉庫までの幹線輸送において、海上輸送へのモーダルシフトを進め、2007年度同区間の海上輸送率は69%(2006年度実績:36%)となりました。

● チーム・マイナス6%に参加

テルモは2006年より環境省が主催する「チーム・マイナス6%」に参加し、地球温暖化防止に向けた取り組みを推進しています。



みんなの止めよう温暖化
チーム・マイナス6%

アソシエイトが自主的に取り組む「ECOチャレンジ」

アソシエイトとその家族が、オフィスや家庭でエコ活動に挑戦する「ECOチャレンジ」を毎年実施しています。2007年度は1,908名が参加し、身近なエコに取り組みました。

また、参加者の取り組みをポイント化し、ポイントに応じて環境NGO・オイスカの「子供の森」計画に寄付しました。

寄付金は海外の子どもたちの環境教育や苗木を植えて育てていく森づくり活動のために使用されます。

● 営業車でエコドライブに挑戦

2008年4月より、「エコドライブ10のススメ*2」をもとに全国の支店で営業車の運転方法を見直し、二酸化炭素排出量の10%削減をめざしています。さらに、東京23区では公共交通機関を利用した営業活動にもチャレンジしています。

Staff Comment

営業車に載せる箱は一つだけ。効率のよい営業ルートで、燃費の改善に貢献します。

金沢統轄支店

平井 督二

営業車の荷台の荷物を量ったところ、成人男性の体重約1人分に相当する70kgもありました。そこで私たちにできる環境対策は何かを考え、車に積載できる箱を一つだけに限定する「エコBOX」を導入し、燃費の改善につなげています。

また、営業活動では、先にお客様のスケジュールを把握した上で自分の行動スケジュールを立てたり、アポイントを取ってから重要な面談に臨むなど、効率のよい営業ルートでの仕事を心がけ、車の稼働時間を減らしています。



*1 モーダルシフト：幹線貨物輸送を、大量輸送ができる海運や鉄道輸送にシフトすること。

*2 エコドライブ10のススメ：地球温暖化防止のための国民的プロジェクト「チーム・マイナス6%」が提唱する、地球にやさしい運転術。

WEB <http://www.team-6.jp/ecodrive/>

資源の有効利用をめざして

テルモの事業活動は、地球の限りある資源を活用することで成り立っています。すべての事業活動における資源のインプット、アウトプットの把握・改善を通し、全員参加型の活動で廃棄物の削減やリサイクルの向上に取り組んでいます。テルモはこれからも、環境に対する負荷を限りなく小さくするための努力を継続していきます。

● 廃棄物の最終処分量削減に向けて

工場や研究開発センター、オフィスでの事業活動では、さまざまな廃棄物が発生します。テルモは、「営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量(埋立量)を廃棄物総排出量の1%未満にする」というゼロ・エミッションの目標を掲げ、分別廃棄の徹底や廃棄方法・廃棄ルールを工夫しています。2007年度の廃棄物最終処分量は廃棄物総排出量の0.4%となり、4年連続でゼロ・エミッションを達成しました。

● リサイクルの促進に向けた取り組み

環境専門部会の事業廃棄物部会を通して事業所間で情報を共有し、アソシエイト全員がリサイクルに努めています。事業の特性上、製品の安全性の観点からリユースは難しい状況にありますが、床タイルなどの他のプラスチック製品や、RPF(固形燃料)、有機肥料などにリサイクルしています。リサイクル率は年々向上しており、2007年度は94%に達しました。

● 廃棄物処理委託先の監査

テルモから排出した汚泥やプラスチック類の廃棄物が、最後まで適正に処理されているかを確認するため、チェックリストを作成して計画的に廃棄物の収集運搬委託先・処理委託先を監査しています。2007年度は36カ所の委託先について監査を行いました。

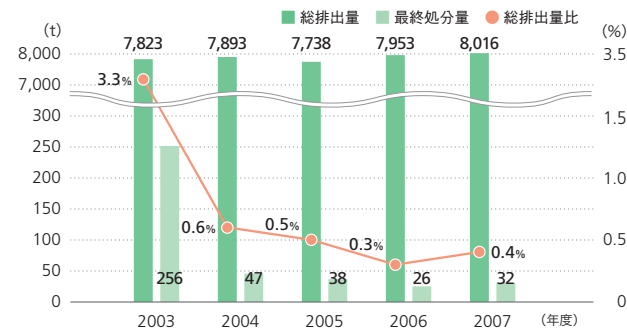


廃棄物処理業者の監査

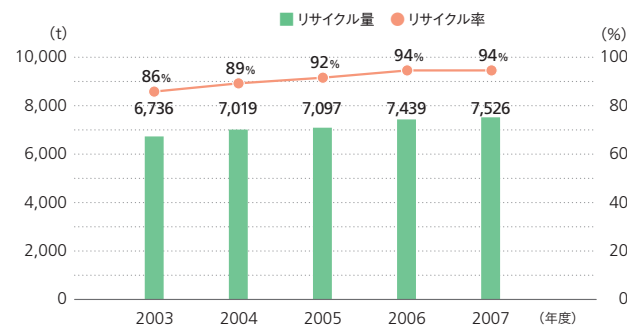
廃棄物最終処分量削減目標

営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量を、廃棄物総排出量比1%未満にする=ゼロ・エミッション

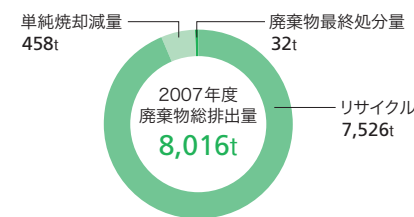
廃棄物最終処分量の排出量推移



リサイクル量とリサイクル率の推移



廃棄物など総排出量(国内)と処理、処分の内訳



化学物質管理・グリーン購入の推進

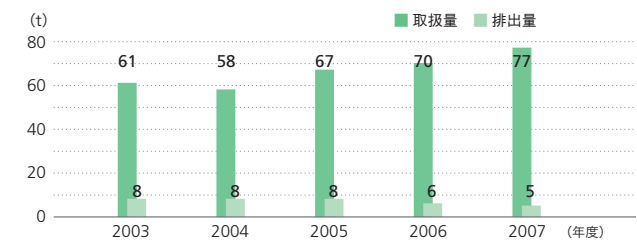
テルモでは、「自主的な目標を設定し、環境保全活動に努めます」と環境基本方針で定めています。厳しい自主管理目標に基づいた化学物質の把握・管理や、グリーン購入の推進など、さまざまな角度から環境負荷低減に努めることで、これからも環境にやさしい企業をめざします。

● 化学物質管理を徹底させるために

エチレンオキド排出削減に向けて

2007年度のエチレンオキドの取扱量は増加しましたが、2006年度に導入した無害化処理装置により排出量は減少しています。微量の排出原因となる製品への吸着量を正確に把握するため、今後も引き続き高精度の検証を行っていきます。また、滅菌器や処理装置の排気口での濃度管理だけでなく、製品倉庫など排気口以外からの排出も把握し、環境基準に相当する自主管理濃度*1を4.3μg/m³に設定しています。事業所の敷地境界においてこの濃度を下回るよう管理を行っていきます。

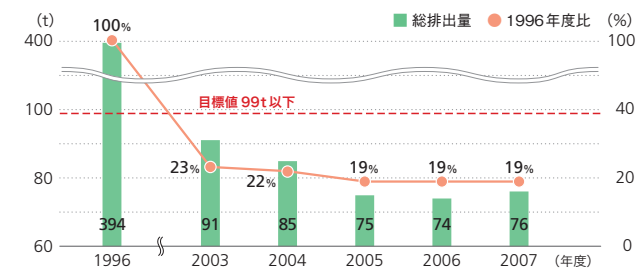
エチレンオキドの取扱量・排出量推移



化学物質排出削減目標

ジクロロメタンの排出量を99t以下

ジクロロメタンの排出量推移



PCBの適正な処分にに向けて

「ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法」、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に従い、PCB*2を使用したトランス、蛍光灯安定器などはすべて取り外しました。速やかに適正な処分ができるよう、日本環境安全事業(株)豊田事業所への早期登録を完了しています。また、PCB微量混入が否定できない重電機器375台について含有分析(メーカー保証を含む)を実施した結果、23台に混入が判明しました。密閉構造などにより分析が不可能な51台の重電機器については、使用終了後に分析を行う予定です。

PCB含有機器保管台数

保管事業所	蛍光灯安定器	コンデンサー	リアクトル	トランス
富士宮工場	459	23	0	0
愛鷹工場	419	17	2	3

● グリーン購入の実施

製造工程やオフィスでの事務用品、その他の備品に関するガイドラインを設定した上で、グリーン購入を実施しています。今後もグリーン購入を継続し、環境保全への取り組みを強化していきます。

2007年度 グリーン購入実績

(単位: 数量: 千個、金額: 千円)

区分	データ	全体	エコマーク品内訳	グリーン購入法適合品内訳	グリーンマーク品内訳
本社・営業合計	購入数量	20	10 (51%)	13 (62%)	6 (30%)
	合計金額	16,553	8,666 (52%)	9,113 (55%)	6,982 (42%)
工場合計	購入数量	53	27 (50%)	30 (57%)	6 (12%)
	合計金額	23,875	10,500 (44%)	10,515 (44%)	3,996 (17%)

※再生紙の古紙配合率偽装により、グリーン購入の規準の見直しが検討されていますが、上記実績は現行のエコマーク、グリーンマークの表示に基づいて算出しています。

*1 自主管理濃度: 参考資料「化学物質の環境リスク評価」第2巻(環境省)

*2 PCB: polychlorinated biphenylの略。ポリ塩化ビフェニル。

信頼性を高める環境監査の実施

「各国の環境保全に関する法律、条例、協定等を遵守します」
 「環境保全に関する推進体制を設け、推進・監査に努めます」と環境基本方針で定めている通り、法令違反や環境問題の発生などを未然に防止するための内部環境監査を継続しています。

2007年度の内部環境監査実施状況

法令違反や環境問題の防止、環境リスク低減のため、テルモグループの工場・研究開発センターを対象に内部環境監査を実施しています。

監査項目

- ① 環境関連適用法令の明確化とその遵法性確認
- ② 環境リスク項目の管理状況とパフォーマンス確認
- 環境管理組織の運営状況
- 廃棄物の管理状況、関連リスクの管理状況
- エネルギー管理と省エネ取り組み・実績の推移状況
- 化学物質の管理状況、関連リスクの管理状況

監査結果

- ① 廃棄物管理において一部書類に不備がありましたが、各事業所とも重大な不適合はありませんでした。
- ② 実態と整合した管理システムが概ね整備されていましたが、より効率的な管理システム構築に向けた整備をスタートさせました。



内部環境監査の様子

改善要望への迅速で的確な対応

愛鷹工場の排気ダクトの排気口吹き出し音について、近隣住民から改善要望を受けました。原因の調査を行ったところ、工場の敷地境界付近ではこの騒音は聞こえないものの、敷地境界から100mほど離れたところでは聞こえる場所があることが判明しました。

愛鷹工場では排気口の向きを工場敷地側に変更し、排気口の手前に消音器を設置して騒音の低減を図りました。また、工場周辺の騒音を測定し、消音効果の確認を行いました。

海外事業所の監査を実施

テルモでは海外の事業所の監査も実施しています。2007年度はテルモフィリピンズ社の監査を行いました。監査項目は「環境法令遵守状況」「環境関連設備の管理状況」「環境保全活動(省エネ・廃棄物・リサイクル)」「作業環境・労働安全衛生」で、重大なリスク・法令違反はありませんでした。



テルモフィリピンズ社の監査

行政当局による外部立入調査

2007年度における環境関連の外部(行政当局)立入調査は、特定の事業所を対象に「化学物質管理の状況」「大気汚染防止法遵守」「水質汚濁防止法遵守」「エネルギー管理状況」について実施されました。いずれも指導事項はありませんでした。

Staff Comment

内部環境監査の
厳正かつ適切な指導は
今後の環境活動に有益です。

富士宮工場 環境推進委員会 委員長

高原 和明



環境への取り組みは、環境マネジメントシステムのもと各事業所単位で推進しています。さらに、遵法性と環境リスク管理の面から有効に運用されているかを調べるため、年1回、内部環境監査により取り組みの確認、指導を受けています。この監査は、専門監査員により客観的かつ公平に実施されるため、適合性評価だけでなく、より有効な運用方法への適切な指導があるのが特徴です。また、他事業所の監査結果も共有できるため、環境への取り組みに有益だと考えます。



「社会・環境報告書2008」に対する第三者意見



駿河台大学経済学部教授
経済研究所長

水尾 順一氏

東京工業大学大学院・専修大学兼任講師、博士(経営学)。日本経営教育学会理事・日本経営倫理学会理事、(株)資生堂社友。神奈川県保険医協会「治験審査委員会」「倫理審査委員会」外部委員。著書に「CSRで経営力を高める」(東洋経済新報社)など。

テルモ株式会社(以下、同社)は、『医療を通じて社会に貢献する』ことを企業理念に掲げ、その具体的な活動内容を「社会・環境報告書2008」で開示しています。企業でCSRの実務を推進し、大学でその理論構築をしながら、「理論と実践の融合」を社会に促進してきた立場から、以下に第三者意見を申し述べます。なお、第三者意見の執筆にあたってメディカルプラネックスを視察させていただきました。

高く評価できる点

① ステークホルダーと一体になって、「人にやさしい医療」をめざした、真摯な姿勢とその行動が適切に情報開示されています。

「医療を通じて社会に貢献する」ことを企業理念として、医師と看護師、医療機器、薬の一体になった活動を促進する同社の姿勢が、本報告書を通じてよく開示されています。

たとえばその一つが今回の報告にある、「磁気浮上型 左心補助人工心臓 DuraHeart」の開発と販売です。2007年に世界で初めて販売されたこの製品は、本格的開発から12年をかけて、全社一丸となって開発されたもので、いわば「チームテルモ」の結晶と考えます。また、総合医療トレーニング施設の「テルモメディカルプラネックス」の活動もその一つです。医師と看護師、臨床工学技士など医療にかかわる人々や、患者をお客様ととらえ、安全で質の高い「人にやさしい医療」の実現をめざす様子も十分にうかがうことができます。

② アソシエイトとともに「環境にやさしい医療」実現に向けた具体的な取り組みが十分に情報開示されています。

同社は環境基本方針に則り、これまでも医療の安全と環境の調和をめざして、医療分野のリーディング企業として取り組んできました。特に、2008年度から「環境問題への本格的な取り組みをスタートさせる」という強い決意のもと、真摯に取り組んでいる様子がよく開示されています。その一つが5年間の中期目標として、1990年度比50%の削減を掲げたCO₂の削減です。他にも事業活動や物質のフローを通じた環境負荷や、化学物質の管理、廃棄物や水使用量の削減状況など、一連の活動が具体的な数値として把握され、明確に開示されています。

今後の改善に期待する点

① CSR活動のマネジメントサイクルを明確にすることが期待されます。

2008年度の自主目標の計画については、前年度の実績にもとづく計画だけでなく、多面的な視点からの計画が求められます。たとえば、時代背景や社会が同社に期待するCSRと、自社の人・モノ・金・情報(同社を特長化させる)の経営資源から強みと弱みを分析した上で、考える「戦略的CSR」をマトリックスさせて、優先順位などを開示することも重要です。その上で、各項目について、まずPlan(計画)を明記し、それに対するDo(実績)さらには、Check(評価)とAct(改善)を対比させていけばさらに充実した報告書となります。

② 会社と社員、労働組合の「三位一体型CSR」活動を期待します。

「人にも環境にもやさしい医療」を掲げる同社だからこそ、会社と社員(アソシエイト)そして労働組合が一体になったCSR活動が今後の重点課題です。特に人権・労働や環境問題への取り組みは、組合の理解と協力が重要な鍵となります。それは、単に労働組合が会社の計画に同意するというレベルにとどまることなく、組合がCSR戦略の計画段階から積極的に参画していくことを意味します。当然のことながら、その前提には三者の責任ある態度と相互協力の姿勢が求められます。これらを踏まえて、社員や労働組合の意見なども開示し、次年度にはその改善結果を公開し説明責任を果たすことも必要です。その結果、CSRに対する社員と組合の意識が一層高まり、同社の持続可能な発展の礎が築かれるものと考えます。



テルモ株式会社

〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷2-44-1
TEL: 03-3374-8111 (代表)
<http://www.terumo.co.jp/>

編集方針

本報告書は、主に社会、環境の側面からテルモの事業活動を分かりやすく報告し、社会とのコミュニケーションを促進することを目的に制作しました。

トップメッセージにおいては、「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念に基づき、人にも環境にもやさしい医療をめざすテルモの姿勢をより具体的に表しました。特集では、2007年からヨーロッパで販売を開始した世界初の磁気浮上型左心補助人工臓「DuraHeart」を取り上げています。

社会報告には、新たに「株主・投資家への責任」の項目を設け、情報開示の方針や具体的な活動を掲載しました。また、継続的にテルモの取り組みを評価していただくために、昨年と同じ有識者の方から第三者意見をいただきました。

参考ガイドライン

環境省「環境報告ガイドライン(2007年度版)」

環境省「事業者の環境パフォーマンス指標ガイドライン(2002年度版)」

対象範囲

テルモ株式会社(一部海外事業所含む)

対象期間

2007年度(2007年4月1日～2008年3月31日)

活動には、一部2008年4月以降の内容を含みます。

発行 2008年10月 / 次回発行予定 2009年9月

®、TERUMO、テルモ、テルモメディカルプラネックス、DuraHeart、セーフゲートはテルモ株式会社の登録商標です。

